

少女の育ての母姉の証言、その一。
「もうそりゃーあの子、えげつないったらないわよ！ 騎士の義理とか言って嫌がる男のこ達を無理やり自分の寝床へ連れ込んで、好きに言うこときかせようとしてるんだから！」



養姉やしなひあねが一体誰を相手に嬉しげに喋ったかは知らないものの、くすくす笑う妖精の告げ口に。久しぶりに、雷が落ちた。常に不機嫌な顔の迫力美少女の空色で長いまっすぐな髪を揺らして。――ヒト殺しい！ と真実の抗議もかき消すくらい、鮮やかで蒼快な一閃だった。

DKD 一騎士竜一

「おっはよ～、ライムー♪」
修行小屋――何となく恥ずかしい勝手ネーミング――での朝方、名づけ主の能天気な声が響く。
「朝だよーう、そろそろ起きる時間なんだよーん♪」
「……ん……？」
朝というには何かがおかしい。眠気よりモヤモヤした感覚がライムを揺さぶる。
「起っきろーん♪ 今日には向こうの山まで遠征するんでしょー？」
だからあたし、張り切ってきたんだぞー！ と。
何がおかしいって、この声の主がこんなに早く起きているわけがない。朝の強い自分より先に。
「あんたねえ……」
ふわふわ頭上を舞っている影の手近な尻尾を、体を起こしてむんずと掴む。
「今何時だと思ってんのよリンティ！ 起きろって言葉は太陽が上がってから使え！」
「いたあーい、親切に起こしに来たのに髪の毛掴むなんてひどーい、乱暴者お！」
「どーせ自分が朝じゃ起きれないからって、夜更かしして夜中に来たんでしょーが……」
大体、と、ポニーテールの毛先をひつつかんだ浮遊ブツに向かって言う。
「誰があんたを連れてくつつたのよ。いつても邪魔しかなしいんだから……妖精らしく自由に好きなだけ、居眠りでもして里にこもってなさいよ」
「だいじょーぶ、今日は朝から夜までしっかり寝てきたもん！」
「昨日は、の間違いでしょーが……だから昨日は平和だったわけね……」
珍しくこの「妖精」が自分の元に現れなかった理由を悟ると、ライムは大きくため息をついた。
「だってえ、今日は向こうの山で、大切な収穫があるんでしょ？」
だから手伝いに来てあげたんだよう♪ 嬉しげにまたフワフワする、妖精というが人間サイズの彼女は、わりと広いこの修行小屋でも空間的には中々うっとうしい。
「あんたはそのまま持って帰るつもりなだけでしょ。いーから、私にかまわないでよ」
「ライムー人じゃ全部黒焦げにしかねないじゃん。この間のそこの畑の末路、忘れたのー？」
「……」
それを言われると弱いライムは、むう……と黙りこむしかなかった。
「ってかまだ月も出てんじゃないの……もう眠れそーにないけど……」
仕方なく湾刀と背負い籠、そして古びた両刃の大剣を手にして、ライムは修行小屋を出た。
朝ご飯を食べる習慣はほとんどないので、小さな水筒だけ肩に下げると力強く歩き出す。
「んー、たまにはこういう早起きもいいなあ♪ この時間からなら朝の内にはつくよねえ？」
あんたが邪魔しなければねと、鳥のような羽でフワフワ背にしがみつく妖精には言うしかない。



「修行小屋」なんて、実際の用途と全然違う呼び名をつけられた山小屋は、耕作や収穫の道具が置いてあるただの物置なのだが。と言ってライムに農耕が出来るわけではなく、近所の畑の雑草刈りや草木の手入れ、食材の収穫をすることがライムに与えられた主な日課だった。

その合間に、今日も持って出た大剣を振り回すことがライムの唯一の趣味で、休憩中にそんなことをしていたせいか、物置小屋は勝手に妙な名前をつけられてしまった。

「ライムのマルヒ・ぷらいべーとえりあ、が一番しっくりくると思うんだけどなあー」

「別に秘密じゃないし。そもそもアレ、私のものじゃないし」

それでも実質、寝袋も置いて剣ばかり振っているライムを見れば、ほぼライムの私室ではあった。

「ライムのおばさん、そろそろ怒ってるんじゃない？ 何日帰ってこないんだー！ って」

「んな事よりおばさん言う方がよっぽどスーリィは怒るわよ。だからあんた、嫌われんのよ」

「知らなーい、人間の考えることなんてー。おばさんをおばさんって言って何がおかしいのさー」

「そんなあんたのせいで今日の収穫、予想より目方が少なかったら、非常識な妖精に大事な食糧分けるコは重罰！ って言われてんだけど」

珍しく細かく事情を説明し、しっしと追い払う仕草のライムに全くめげず、牡丹色の髪——長くまっすぐなポニーテールをなびかせてリンティはふふふんと笑う。

「人間の価値観で非常識って言われたって知らないもん。ほんと、人間ってワガママなんだから」

「あんたには言われたくないでしょ……」

呆れるライムも、この妖精が人間の養姉、スーリィ・シュアに何故嫌われたかはよくわからない。—スーリィ、好き嫌いはハッキリしてるけど……別に妖精だからって感じじゃないよね？—
……何しろ、人間でないという理由なら、ライムだってとっくにアウトになっていたはず。

魔物やら妖精やら人間やら、色んな呼び名の生き物がいることは一応ライムは知っているが。自分がどんな呼び名になるのかも、それぞれの特徴も実はよく知らない。ただ、「人間」らしい養姉と「妖精」のリンティや、そして自分は、違う生き物であることだけはわかる程度で。

「大体ここも向こうもあたし達の縄張りのお山なんだから、人間こそ侵害者なんだぞー」

「それ、何度も聞いたから……あんた以外の妖精からもしつこく……」

何回か招かれた妖精の里では、出会う者ほとんどがこんなハイテンションだった。

一年前、北山で出会ってから何故かやたらに関わってくるようになった、自称妖精で一見同年代の少女リンティ。鬼的な美系部類に入るらしいが、ライムにしたらいつもただ騒がしいだけだ。

出会いは単に、リンティを襲っていた生き物を追い払っただけだが、別にお礼で招待されたわけでもなかった。何しろ妖精なら魔物でもわりと自力で倒せるらしいし、お礼という感覚をまず持っているか怪しい！ というのが養姉の言だ。

「——とにかく、だけど」

今日の収穫物だけは、この妖精に分けるわけにはいかない。養姉スーリィの好物を収穫するため、わざわざ隣山まで出向かせられ、「重罰」までチラつかされたライムにとっては死活問題だ。

—でもついてくる以上は、分けろってことよね、つまりこれ……—

「頭痛い……」

「なにになにー？ 何か言ったあ？ ライム」

ヒトの気も知らずにニコニコ首に抱きつくリンティに、今日こそはガツンと突っぱねなければと……そうしているつもりなのに通じないのが、つまり妖精という、自分とは違う生き物らしい。

そしてスーリィ屈指の極秘スポットに辿りつき、いくらか収穫が進んでいたその時に。

突然耳を突き刺す動物的な唸り声が響いた。

「何、魔物……！？」

慌てて籠を置いて大剣を構える。ほとんど同時に、数十メートル以上向こうの木々が、ライム達に近づくようにどンドン折れ倒れ始めた。

「ちょっとっ、この木はやめてよね……！」

「ありゃー？ 魔物でも走ってるのかな？」

呑気なリンティを横目に予想通り巨体の、触手に近い四肢を持つ魔物が疾走してきていた。

「……——って、え？」

おまけにその巨大な疾走物の前。対照的にこまこまと必死に走ってくる人影が二つあり。

「たっただたっ……！ おたすけーっ！」

「……—っ！」

どうやら魔物に追われているらしいが、こんな辺鄙な場所で早々有り得る事でもなく、

「えーっ……わっかい男のコ……二人い？」

リンティも心底意外そうに、こちらに向かって走ってくる人影と魔物を認識したようだ。

「ちょっと、あいつら、邪魔っ！」

「だねえ」

ライムから出向いて魔物を片付け、収穫中の背後の木々を守ればいいだけの話なのに、

「このままじゃここまで突っ込まれるねえ。ライムいつも先手必勝なのに～」

そうなれば当然、この辺り一帯の収穫は台無しになる。それでなくても希少な果物なのに。

「そこのアンタ達！ どいてなさい！」

「—！」

焦るライムの一喝に気付いた二人が慌てて付近の草むらに転げ込み、魔物の前から離脱する。

魔物は一瞬足を緩めかけたが、ライム達の姿に気付いてそのまま疾走を続けた。

「でもライム、この距離じゃもう、本気出さないと止められないよー？」

——その「本気」自体が周辺の果物を黒焦げにしてしまう可能性に、改めてライムは、もう！ と、大剣を握る両手に、柄にヒビが入る程の力をこめた。

……後から、魔物に追いかけていた年上の方の少年は語る。

それはとても軽やかな一撃で、とても重い大剣のものとは思えなかったし。ましてやそんな、一見ただの迫力美少女に巨体の魔物が吹っ飛ばされるなんて、普通は有り得ない光景だった。

「……………」

思ったよりもスムーズに剣だけを振れたことに、ちょっとライム自身も驚きつつも……。

「あーあー……折れちゃった、ねえ〜」

その代償に、見事にバッキリいってしまった愛用の大剣を茫然と見つめて。しばらく黙りこんで現実を受け入れた後、大きく溜め息をついたライムだった。

剣が折れてしまったショックなのか何なのか。少年二人やリンティがもさもさと収穫物を食べ出したことも、気にならなくなってしまったライムだったが。

「——で、アンタ達……何なのよ？」

遠慮なく果物を頬張る彼らに、じーっと恨めしげな視線を向けて言った。

「いやーもお……ハムハム……ほんと、助けてくれて、うまーい、感謝！」

「……………」

よく喋る少年と、全然喋らない一回り小さい少年。見たことのない服装の彼らだが、彼ら自体はほぼ同じ格好だ。二人共深い緑色の目と、無造作な緑の短い髪をしているので、兄弟だろうか。

「これうまーい！　うちの里でも滅多にとれねーのにー！」

「……………」

「だから何なのよ、アンタ達」

少年達は余程飢えていたようで、珍しくすぐ満足したらしいリンティとは違い、ひたすら次の果物へと手をのばしている。

「何なのって言われても……何なのって、何なんだ？」

「何者かってきてんのよ！　何でこんな山奥に子供がいるわけ？」

「あんただって子供じゃん……」

うんうんと、弟らしき少年の方も同調する。見たところ確かに年齢は、ライムは兄の方より二、三歳年上なだけの感じだった。

「私は元々山に住んでんの。迷ったのなら麓まで送るから、町の名前を言いなさい」

それでも淡々としているライムには、彼らと落ち着きの違いのようなものはあり、少年二人は一瞬怯んで顔を見合わせていた。

「……町って……俺達の里ってこと？」

「それ以外何処に送るのよ」

「里には、帰らない」

「はぁ？」

「俺達、邪魔者なんだ。だから帰れない」

「……………」

一しきりお腹を満たして落ち着きはしたものの、子供ながら難しい顔で座り込んでいる兄と、その横でまだ黙って食べ続けている弟は。確かに何か、ワケありではあるらしかった。

「……………どーすんのかな……………」

「放っとけばまた魔物に襲われるか、遭難してのたれ死にかだよねえ？」

うーんと両手を組んで悩むライムに、リンティがあっさり口笛を吹くように言う。

「ライムのおばさんに相談してみれば？　ライムだってあの人に拾われた身なんだし」

「でもスーリィ、猫の仔一匹、これ以上増やさないってハッキリ言ってんだけど……」

……それでも彼らの行き先くらい、相談には乗ってくれるかもしれない。

どの道自分では手に負えないことだったので、大人に任せようとあっさりライムも心を決めた。

「——アンタ達、その籠持ってついておいで」

最早かなり中身も少なくなっていて、軽くなってしまった籠を兄の方に持たせたところで。

「……あっ！」

籠をしょった少年の視線の先、ひっくり返っていた魔物が起き上がり、こちらを凝視していた。

「何だ、もう起きたんだ。巨体だけあって丈夫よね」

くるっと、折れてしまった大剣の代わりに、収穫に使っていた湾刀を構えたライムだったが。

「……って、あいつ？」

不思議そうな声の少年を尻目に魔物は背を向けると、足を引きずるように遠ざかっていく。

「ライムの剣を受けて、戦う力なんて残ってるわけないじゃーん」

「えええーっ……ほんとに？」

少年は去っていく魔物とライムを交互に見て、更に不思議そうな顔をする。

「……あんた……追わねーの？」

「——？ 何で追うの？」

「……いや……魔物、だし……フツーは見逃さないかなって……」

座り込んでいた弟を立たせながら、ごによごによと言ひ淀む少年。問いの意味が全くわからないライムは、少年達の周囲を面白そうにフワフワしているリンティに視線を移した。

「ほら、さっさと行くよ。夕飯の材料も仕入れていかないといけないんだから」

「そーだよねえ。あんなの捕まえたって美味しくないし、早く帰ろ〜」

折れた大剣を背中に斜め掛けに、湾刀は手に持ったままハイペースで歩き出したライムに、少年達は慌てて小走り+引っ張られ歩きで後に続く。籠を背負いながら弟の手を引っ張る兄の方は、それでもライムのペースについてくるのに苦はないようだった。

ライムは、半分振り返りながら少年達の顔をまっすぐにみると、

「……アンタ達、名前は？」

深い空のような青い目に映るあどけない少年達は、もう一度、戸惑ったように顔を見合わせる。

「私はライム。こっちはつれのリンティ」

「こっちはって何さー、勝手に教えなくてよ！」

ぶーぶー言うリンティをこぼきつつ、既に少年達から視線を離れたライムの後ろ姿に、数秒だけ悩んだ後、年上の少年の方は。

「——俺は、^{たけまる}武丸。こっちは、^{さすけ}弟の佐助」

「……」

リンティと同様、勝手に紹介されて不服そうな弟の頭をぼんぼんと撫で叩きつつ、はっきりと名乗った武丸の方を、もう一度ライムはゆっくりと振り返ると。

「——あっそ」

特に何の表情も浮かべないまま、すぐまた前を向いてさっさと歩き出してしまった。

代わりに、半分後ろ向きにフワフワ横に続く妖精が、二人の少年を不思議そうに見つめる。

「タケマルにサスケ？ ……変わった名前〜」

ひょっとして……とリンティは、何やら警戒したような顔つきとなった。

「ヤマトの出身かい？ 鎖国してるから帰れないってこと？」

「ううん、名前だけヤマト向けなんだ。……生まれも育ちも地の大陸だよ」

「へーっ、それでも言葉、通じるんだあ。っていうか、こんな遠くまでよく来たよねえ」

ライムは知る由もなかったが、今ここ「風の大陸」は、大海中の島国「ヤマト」を挟み「地の大陸」とは真逆に位置しているのだ。いずれも生活レベルは大きく変わらないらしいが。

「ま、ヤマトのヒトじゃないなら、まだちょっとは望みもあるかも？」

意味ありげにそんな事を呟いた少女に、どういう意味かと武丸が尋ねかけた矢先……。

「うわっ！」

「！」

ぼん！ と音がたっても不思議ではないくらい、突然弾けたように消えてしまったリンティに、思わずのけぞった武丸と、それに驚いた佐助がびくっと後ずさる。

「——気にしないで。いつものことだから」

「いつものこと……って？」

「妖精だから気まぐれなんですよ。って、スーリィは言ってたけど」

「妖精？ アレが？」

ふおー……初めて見たー……。二人してリンティの消えていった方向をしばらく見つめていたが、構わずにライムが歩みを進めると、また慌ててひよこひよこ後を追ってくるのだった。

*

そして夕刻前。

——あれ、これって結構重大事だった？ 色々な事が重なったライムは今頃やっと思覚する。

見知らぬ少年を連れて帰ったライムへの養姉スーリィの驚きようは、意外に結構な剣幕だった。

「あんたってば……いったい何処でそんな若いの、しかも二人もテイクアウトしてきたのよ！」



「知らない。山に落ちてただけ」

「落し物は1割分けてもらえば十分なの！ ってああっ、アタシの大切なバインの実まで！」

それは当然、目方が減るところか半分以下になっている収穫物に、長いフワフワの髪を振り乱しながらのスーリィのツッコミは入るだろうが。今はまだその一言で何とか済んでいるようだった。

「あの妖精といいこの和装二人といい、どうしてこう厄介事拾ってくるの、あんたって子は！」

「ワソウ？ 何それ？」

腰に巻いた布で前開きの上着をまとめ、膝から下の着衣が細まる変わった服装の彼らを見て言う。

「ヤマト人の格好のこと！ それでなくてもここの里はみんな異人ギライなんだし、オマケにヤマト人ときちゃ、アタシだってかばいだてしようがないってもんなの！」

「あ、あの……」

恐る恐る何か言おうとしている武丸が気になりつつ、ライムも疑問を口にする。

「かばいだてって、ただの子供二人相手にそんなのいるの？」

首を傾げるライムに、スーリィはふーっと、大きくため息をついた。

「時期が悪過ぎるってことよ。対立国のディレスの方が、ここの里には影響力あるんだから。このコ達だってどんな理由でここまで来たのかわかったもんじゃないし……」

「あ、あの！ 俺達ヤマト人じゃないです！ これ和装じゃないし、ヤマト語も喋れないし！」

片手を上げて必死にアピールする武丸に、胡散臭そうなスーリィの間で、リンティの言ったのはこーいう事だったのかなと納得するライム。あの妖精はたまにこうして鋭いことを言うのだ。

「確かにちょっと、アタシの知ってるヤマト服とは違う所もあるけど……ヤマト人じゃなきゃ何。

捨て犬？ 捨て猫？ 捨て芸人？」

「捨て？ 捨て……そっか、捨て忍者です！」

「――は？」

「――？」

「――に一ちゃん？」

虚をつかれたようにキョトンとするスーリィに、ライムまでつられてキョトンとなった。そして初めて、弟の方の少年が驚いたように声を出し、怪訝な顔つきをして兄の方を見ていた。



「忍……者って……今アナタ、言ったかしら？」

「はい！ 忍者です！」

「忍者って、あの……地の大陸で暗躍してるって噂の、隠れたる刃、忍びの者とかいうあの？」

「あ、はい！ なので内緒にしてください！」

「はい？ ……よくわからないけど……「捨て」に反応したのは、いったいどういうことかしら」

「……スーリィ？」

何故かテンションが落ち着き、かえって語調が強まった養姉の真面目な目に違和感満点だった。

「どの道忍者なら、今はヤマトに奉仕する奴がほとんどでしょう。知らないとは言わせないわよ」

「はい。俺達、それが嫌で、里を出て来ました」

「――はい？」

「もうすぐ戦争になるから、ヤマトのために戦えって。嫌だって言ったら、不心得者だって」

「……」

それって……とスーリィは、呆れたように大きな深いため息を改めてついた。

「ある意味……ヤマト人を庇うより、もっとまずい状況じゃないの……」

それがこの先に起こる騒動を予期しての呟きとは、今のライムには知る由もない。

「スーリィ。忍者って何？ 騎士とは何か違うものなの？」

ライムにとって、「戦争」という単語からまず連想するのは「騎士」だった。

「そーねえ……主君に忠実で、武力を鍛え上げられた大量生産の兵士という意味じゃ、似てくはないけど……騎士に比べて高潔でもなければ、孤高でもないという話ね」

「……？」

ヒトとヒトが奪い合う「戦争」の花形、それが騎士だと。この手のことにやたら詳しいスーリィから教えられてきたライムでも、結局あまり違いがわからなくはあった。

「まあ、騎士が平地で決闘向きなら、山野を駆ける隠密行動向きの戦闘集団が、忍者だと思うわ」それで曲がりなりにもライムのペースについて、山道を歩いてこられたのかと。

「それにしても、あんな図体だけの魔物に……」

何故逃げ回っていたのだろうと、新たな疑問も湧いてきてしまったのだが。

「……」

うん……と。両腕を組みながら目を閉じて黙っているスーリィを恐々窺う武丸から、何となくライムも目が離せなかった。

「……………」

一方、武丸に手をひかれている佐助は、始終下を向いて相変わらずふてくされている。

「……………ま、いっか。ややこしいことは、糖分補給してから考えることにしましょ」

目を開けた時には育ての姉は、いつもの軽い調子に戻っており。

「とりあえずアナタ達、ご飯食べていきなさい。今日は腕によりをかけちゃうわ♪」

材料とってきたわよね？ とライムを見るスーリィに、

「はい」

帰りに寄った谷川で、仕掛けにかかった魚をくるんだ布を籠の底から取り出した。

「おー、よしよし、いいじゃない。これと昨日収穫した野菜があれば、結構豪華に出来るわね♪」

「……スーリィ、熱でもあるの？」

何故かルンルンという感じの養姉に、つつい不審の目を向けたライムだったが、

「ないわよ♪ ちなみにあんたは明日、バインの実損失罪で重罰決定だからね♪」

「……………」

油断していた頃の不意打ちに全身がピキンと固まり、背筋にすーっと嫌な感覚が走る。。

「……………スーリィ……それ……………」

でも、とやると言いかけたライムだったが、諦めて言葉を飲み込んだ。その様子を武丸が見て不思議そうにしていたが……ライムには、スーリィには逆らえない事情があるのだった。

スーリィは、料理は上手いんだろうなとライムは思う。

元々焼いてあったパンに加え、魚一匹と野菜をいくつか使っただけで、スープやらサラダやら揚げ物やらパイが出るのは朝飯前らしい。それでも日頃と比べると異例の手の入れようだ。

「うまーい！ 俺、魚って苦手なのに、これはうまーい！ すげー！」

「……………」

喧しく嬉しげで忙しない武丸と、ゆっくりながらも美味しいと感じているのか、心なしか少しは表情柔らかく食べ物を口に運ぶ佐助に、スーリィは満足げな笑顔を隠そうともしていなかった。

「うふふふ～、たんとお食べ～。無口で小食な誰かさんの分も遠慮なくね～」

——何かスーリィ、エネルギー発散してる？ とライムもちょっと悟った。

ライムはあまり食事をとらない。日に二度、何か食べれば多い方で、大体はスーリィ一人分の食事の残り物を気が向けばスーリィが持ってくるか、家によった時に包んでもらう程度だ。

「子供ってフツーこうよねえ……何でうちの子は食べないのにちゃんと育つのかしら……」

一人分だと料理はあまり作り甲斐がないらしく、日頃の食事は至って簡素なのだった。

「食べないのに痩せないのは何でなのかな……」

ぼそっと呟いたライムに幸い誰も気が付かなかったが、スーリィの見立てでは十五歳くらいらしいライムは、そのわりに体つきが大人びている。そのためか人里に行く度に悩まされることがあり、もう少し華奢で子供っぽくなればうとうしいのが減るのかなとは、たまに思ったりもした。

そういう意味では、ライムを「あんたも子供」と言った武丸はわりと珍しい部類に入る。

一考えてみれば、リンティ以来か……子供ってフツーに言われたのって……

と、そこまで思い至ったところで、言葉を飾らない者への嫌な予感がすぐに湧き起こった。

「——どーお？ 美味しい？」

自分はあまり食べずに子供達の食べっぷりを見守っているスーリィに、武丸も無邪気に笑う。

「うん、うまーいよ！ ありがとー、お婆さん！」

——ピシッっ。

場の、というよりスーリィの周囲の空気が固まったことを、ライム以外にはひょっとしたら、佐助は気付いていたかもしれない。無表情ながら食事を続ける手を一瞬止めていた。

「……ほほほほほ～。いいってことよ～」

この顔を見るのは多分、リンティをここに連れてきて、同じ呼称を口にした時以来だろう。ちなみにそれ以降、かの妖精は出入り禁止をくらっているわけなのだが。

「それじゃ、ライム、ちょっとこっちにいらっしやい」

「……………」

何で私が……と頭を抱えつつ、無言の圧力の下、ライムは渋々隣の台所へと招かれていった。

食事を続ける二人の少年をドア越しに窺いながら、スーリィはうふふとライムに微笑む。

「ライムはあのコ達、どうしたいのかしら？」
ほほほほほ。笑顔が固まったままの養姉に対して、これ以上自分に何が言えるだろうか。

「……どうもしたくないけど」

「よねえ。あんたに限ってねえ」

うんうんと満足げに頷き、バシッと綺麗な微笑みを決めるスーリィは、

「一刻も早く、お引き取り願いなさい」

語尾にハートが付きそうな声の明るさにも関わらず、全然笑っていない目に反論の余地はない。ライムはふいっと台所を出て、裏の井戸から組み上げた水を軽く浴びてから自室に帰ると、いつものように数日分の着替えと軽い間食を用意するのだった。

ただし今回は、明日の「重罰」に備えた装備も、別途必要ではあったが。

*

「へー……こんな専用の部屋があるんだなあ、いーなあ～」

「…………丸太小屋だ…………」

ひとまず、いつまでもスーリィの目のつく所に置いておくわけにもいかず、武丸と佐助を修行小屋まで連れてきたライムだったが。武丸も佐助も何だかプチ感動しているようで、

「明日、二人とも町に連れていくから。今日だけは泊めてあげるけど、後は知らないから」

——コイツら全然聞こえてないな……とは、浮足立った彼らを前にわかりはしたものの。

ライムとしても「重罰」を前に気が重かったので、彼らに構わず早々に寝床に入ると。今朝はほとんど眠れていなかったことを思い出しながら、襲い来る睡魔を無抵抗で受け入れた。

「——あれ？ ライムさん、もう寝ちゃったのか？」

何故か自分を「さん」付けしている武丸に違和感を覚えつつ、固く閉じた目をあける気はない。

——何か話したそうにしてるけど……ま、いっか……—

どうせ明日になったらお別れなんだしと。深く考えることもないまま眠りに落ちていった。

珍しく、彼女のいない夜が続いたせいだったのだろうか。

存在感は絶えない妖精の彼女は、現実でそばにいない時でも、夢に侵出してくることがあった。——というわけなんだけど……彼らは、キケンじゃないかな……？—

薄暗い白い森という不思議な空間の中、ポニーテールの少女が誰かと話をしている。

妖精の里は確かそんな白い場所だったなと思いながら、少女の話相手も見覚えがある妖精で、確か監督役とかブレインとかそんな呼ばれ方をしていた気がする。

——ライムに関わらせても大丈夫かな……？—

キケンに決まってるって笑う相手に、難しい顔をする少女にライムも何となく頷きながら……その日の夢はわりとあっさりと、幕切れを迎えることになった。

……というの。

「ライムさーん！ お腹減ったよー！」

空腹で目が覚めたらしい成長期の少年の悲鳴に、二日連続早朝に叩き起こされたライムだった。

「…………あのねえ…………」

一応数日分と思って持ってきていた間食が、二人の少年の一食に消えた状態に。ライムは改めて、一刻も早く町に捨ててこようと心を決めた次第だったが。

「これ何、ひょっとして鎧！？ 騎士とかそういうのが着るって噂の！？」

「…………きらきらの刀環だ…………でも刀身は刺突型…………？」

修行小屋を物色して楽しそうな武丸と、武器に興味がありそうながら相変わらず無表情な佐助。

——何考えてんだか、コイツら……何かリンティ並みにマイペースよね……—

今の状況は全て成り行きというのも大きいけど、ちょうど一年前、こんな感じで傍観していたら何故か居憑いたハイテンション妖精の姿がまた重なってしまった。

「そーいえばリンティ、見ないわね……」

あの子朝弱いしなと思い当たるが、今日はこれから町に行くので入れ違いになるだろうと思うと、ホッとするやら、何となく物足りないやら。

何にせよこれ以上騒がしいつれを増やすこともない。まず「重罰」を消化して早いところ町に行き、厄介事とは距離を置くに限る。それがこの山奥で暮らすライムの基本姿勢で、ひいては養姉からの大事な言い付けだった——人間でないライムが二度と、誰も殺してしまわないための。



知らず、目つきが険しくなったライムにも全く構わず、武丸が明るく掴みよってきた。「ねーねー、ライムさんってひょっとして騎士なの！？ 昨日も何か話してたし！」
「……騎士じゃないけど。見習い、って言われたかな……」
「だからあんなに強いの！ この鎧いつ着るの？ ひょっとして戦争行くの？」
「行かないし——興味ないし」
遠出をする時以外、久しく袖を通していない鎧の存在を久しぶりに思い出した。元々スーリィのお下がり、彼女のお伴に数回、短い旅に出た時に装着したものだ。
「そっか！ 良かった、戦争嫌だよな、ライムさんも！」
「……」

別に否定することではないので、はあと呟いたライムに、武丸はまた嬉しそうな顔をする。その様子を佐助が複雑そうな目で見ていて、嫌な予感がするとでも言いたげな顔つきだった。
「いいから。これから町に行くから、さっさと荷物まとめなさいよ」
別にまとめるような荷物はほとんど持っていない少年達だったが、なけなしの武具は持っているようで、しかし内容は隠しており、「忍者」について多少は気になったライムだった。

昨日よりも早い足取りで、足場の悪い斜面が続く獣道を滑り落ちるように下っていく。
武丸と佐助は確実にぴったり後ろからついてきていて、初めての場所のはずなのに慣れているライムと同等に行けるのだから、山を駆けるという点では確かに、ライムより専門家のようだ。
行く道すがら、ライムは素直な疑問をぶつける。
「アンタ達、これまでどうしてきたの？」
「これまでって？」
「向こうの山に迷い込むまで、何して生きてきたのよ」
「里を出てからってこと？」

里のことはどうやら「重大機密」らしいが、出てからのことはあっさりとして武丸は白状した。
「ヤマトに行くはずの船で北の島に行って、その辺のワープゲートに入ったらあの山に出たんだ。お腹が減ったから食べ物を探してたら、昨日の奴の縄張りに入っちゃって」
「つまり、アンタ達からちょっかいを出したってわけね」
うん……とバツの悪そうな顔をする。山に生きている者としての、相手の領分を侵した方が悪いという感覚は、ライムと共通するものがあるようだった。
「まあ、要するに無謀だし無茶よね……子供だけで知らない所で生きていこうなんて」
ライムだって五年前にスーリィが拾ってくれなければ、生活の仕方や人との関わり方、そもそも自分がヒトという生き物であることすらもわからないまま、途方に暮れていたはずだ。
「ライムさんには、昨日のおばさんがお母さん？」
「拾ってもらって、剣を教えてもらってるだけ。師匠と弟子だってスーリィは言ってた」
ライムには、五年前より前の記憶が全くといってない。スーリィと出会った頃から意識に灯はともり、ライムと呼ばれるようになって物心がついたといっても過言ではなかった。

まるで、人間という生き物に触れた事で、ようやくヒトらしい在り方を知ったかのように。
「師匠と……弟子……」
武丸はポカンと口をあけて目を丸くして、飲み込むようにそのフレーズを呟いた後。
「あっ、あのさ、ライムさ……」
「——着いた。アンタ達は外で待ってなさい」
山の中腹。町にはまだ距離があるが、小規模な人里がすぐ先に見えた所で、ライムはぴしゃりと話を打ち切っていた。

「何処行くの？ 町ってここじゃないの？」
「ここはただの山里。用事で昼までよっていくだけ」
彼らが昨日消費した果物の分をここで働かなければいけないなんて、わざわざライムは口にする方ではない。しかしそんなライムの思いを知るべくもなく……。
「——何でついてくるのよ」
「だって昼までって……俺達、どうしてればいいのか？」
がく——と。心細そうな目つきの武丸と、その後ろでぶすっとして相変わらず喋らない佐助の様子に、それでなくても「重罰」で気が重いライムの頭はますます重苦しくなっていた。

スーリィ・シュアは、山奥でほぼ自給自足で暮らしているものの、たまに山里や町に降りては「便利屋」と名乗って様々な手伝い仕事をして小銭を稼いでおり、魔物退治や賞金稼ぎでない限りライムには基本的に関わらせないが、「罰」として敢えてライムにさせることは度々にあった。

もちろん「罰」は不定期なので、得意先への訪問でもこうして突然にはなる。どうか「今日は都合が悪い」と断ってくれないか……儂い望みをかけながら毎回呼び鈴を鳴らすライムなのだが。

「あら、らーちゃんじゃないの。久しぶりに来てくれたのかい」

その、口調とは裏腹に全く柔らかさのカケラもない声色の無表情な女性が、不機嫌そうに立っているライムを意にも介さず、ライム以上に不機嫌そうな仁王立ちでドアを開けて出迎えた。

「もっとあんたをよこしてくれるようになって、ずっと言ってるんだけどね。すーちゃんもあまり来てくれないし、来たからにはしっかり働いておくれよ」

「……………」

おばちゃん。という表現がまさにピッタリの、くりくり頭に小柄という出で立ちでありつつ、気さくさや親しみは微塵もないおばちゃんと、ひたすら無愛想なライムの黙殺の一騎打ちだ。

「うひゃー……ライムさん、こええ……………」

「……………」

武丸と佐助は完全に無視され、ライムの背後で唾然としつつ、ライムの険しい顔つきと、ドア越しに見える家の中の様子に言葉を失っていた。……怯えてるといっても過言ではなかった。

いくつも散乱し、異臭を放っている異様な詰め物の袋と、詰め切れていなくて天井まで届きそうな不要物の数々……夜でもないのに灯りに火を入れないと、陽が遮られていて何も見えない。

……こういう家を「ごみ屋敷」と呼ぶのだと、後に彼らは教えられることになる。

黙々と不要物の袋詰め作業に没頭しながら、次々と外に運び出しては村の焼却炉に放り込み、灯りの火と油剤を使って点火していくライムの姿に。

「——俺達も手伝うぞ、佐助！」

「……………えーっ……………」

物凄く嫌そうな顔をして後ずさる弟を、必死に引っ張って武丸が家内に連れ込もうとする。

「なんだい、アンタ達。らーちゃんの邪魔をするんじゃないよ」

「えっ……えっと……」

何故か立ちほだかったおばちゃんの無機質な視線に恐れおののく。

どうやらおばちゃんにとって、働き手はライム一人で充分らしかった。

「らーちゃんは無愛想だけど美人だし、良く気が付いて、とにかく働き者だからね。安産型だし、うちの息子の嫁に来ておくれって何度も言ってるんだけどね」

息子は日中はいないという事だが、他に住む者がいること自体、少年達には衝撃だったようだ。

ライムはひたすらノーコメントを貫き、おばちゃんのラブコールを全く相手にしていない。

「信じられねー……………と、とりあえずどいてよ！」

家に入るのは諦め、外に出た袋を運ぶのを引き受けた武丸に、ライムは黙ってごみ袋を手渡した。

「らーちゃん以外の素人にはお金、払わないからね」

おばちゃんのその反応も、ライムには予想済みではあったようだが……。

「——いてっ。何、今の？」

何個目かの袋を受け取った武丸が、一瞬バチッと走った異音と軽い痛みで首を傾げる。

「……………もう、いいから。外で待ってなさい」

不思議がる武丸に対し、一段と厳しい顔をして睨みをかけてきたライムに、それでもフルフルと武丸は首を左右に振ると……。

「弟子は、師匠の手伝いをして当然！」

「——は？」

思わず呆気にとられて動きの止まったライムの手から、新たなごみ袋をもぎとった。するとまたバチッとして「いてっ」と繰り返しながらも、外で立ち尽くしている佐助とは対照的に、慣れない手つきながらも必死に動き回り続ける武丸を、複雑そうに横目で見るライムだった。

おばちゃんは最後まで無表情に、「らーちゃん、お嫁に来てよ」と言い続けていたが。太陽が南中するまでというのが元々の決まりらしく、昼時になってやっと解放されたライムは、里の入り口の柵に腰かけながら、持ってきた小銭袋に何枚かのお札を加えてふーっと大きく息をついた。

「これなら何とか足りてくれるかな……………——はい、アンタもこれ」

「え？」

「分け前。一緒に働いたんだから、当然でしょ」

武丸に一枚ひらりと、紙切れのようにあっさり手渡したが、受け取った武丸は不思議そうに目を丸くするばかりだ。というのも……。

「いいの？ 師匠からお小遣いなんてもらっちゃって」

「—————ちょっと待ちなさい」

二度目の聞き捨てならない科白に、さすがのライムもつつこまざるを得なくなった。

「今、何て言った」

「うん。ライムさんは俺のお師匠さんだって」

佐助の手を引きながら、にこにこライムの方を見て答える。

「って、誰がアンタの師匠なのよ！」

バチバチっ！ と一瞬、ライムが座っていた柵に何故か火花が飛び散っていた。うわっと驚いた武丸とびくっと手を握る佐助を見て、一呼吸置いてから柵を降りたライムだったが、

「だってライムさん強いしカッコいいし！ 俺はライムさんに弟子入りするって決めた！」

ライムが何か言う前に、負けじと武丸が自己主張する。

「俺達役に立つから、ちゃんとライムさんのお手伝いするから！ 弟子にしてくれよ！」

「……に一ちゃん……」

武丸の手をひっぱる佐助の両手にぎゅーっと力が入り、不満そうな顔を隠しもしない。

「——ほら、弟も嫌そうじゃない。バカなこと言ってないで、住み込みの働き口でも探し……」

その時突然、ぼふん！ と。軽い爆風のような衝撃が、ライムと武丸の中間から湧き起こった。

元々口数が少ないライムは、何かあると自分が言いかけた事なんてどうでも良くなってしまう。その爆風を起こした張本人に文句を言わんと、武丸より斜め後ろの方向にキッと向き直った。

「危ない出方するなって何度も言ってるでしょ、リンティ！」

「——面白いじゃ〜ん。弟子にしてあげなよう、ライム〜」

ライムの視線の先、里の出口から数メートル離れた地点で。突然現れた上、衝撃で気を失ったらしい佐助をぬいぐるみのように何故か抱えているリンティがいた。

「さ、佐助！？ え、何！？」

「あははは〜。ごめーん、ちょっとこのコ、借りていくねー」

「ええっ！？」

脈絡もなく現れた彼女は悪びれもなく少年を抱えて、出現した時と同じく軽い爆風を起こすと、風にまぎれて、跡形もなくまた消え去ってしまった。

「「……………」」

一瞬の出来事に焦る暇すらなかった武丸とライムは、消えた二人がいた場所を眺めるしか出来ず。

「さ、佐助が……妖精に連れていかれたー！」

「……何考えてんの、あいつ」

ウンザリ顔のライムの横で、どーしよーと困り果てた感じの武丸が助けを求めるように見つめてくるので、ますますズーンとくる頭を片手で抱える。

「ライムさん、佐助……大丈夫なのかな……………」

「わざわざ危害を加えたりはしないと思うけど……おもちゃにして思う存分に遊んだ結果、傷がついちゃいましたっていうのは、なくはないんじゃない？」

えーっ！ あたふた余計に慌てる武丸にも、これ以上何とも言いようがない。

「妖精とか何考えてるかワケわかんないもの。リンティも大概気まぐれな奴だし……」

それはここ一年の付き合いの中で、身にしみているライムだった。

「そもそもさ、まずさ！ 佐助、返してくれるのかな！？」

「それは……借りるって言ってんだから、返す気はあるんじゃないの？」

「そ、そーだよな……ちゃんと返しに、来てくれるんだよ、な……」

そこまで言って、捨てられた仔犬のような目でまたライムの方をじーっと見る。

リンティが佐助を返しに来るなら、現れるのはまたライムのいる所だろう。そうなると武丸は、佐助の無事を確認するまで、尚更そばを離れてくれるはずもなかったわけで。

「……………」

はぁ…………と、深いため息をつきながら、お札を加えた小銭袋を持ち上げてライムは眺めた。

「……とりあえず、予定通り町に行くわよ」

「うん。俺、ライムさんについていくから」

「重罰」は「重罰」でも、それで得た糧は自由に使っていいとスーリィから言われているライムは、武丸達のことを抜きにしても元々町に用事があったのだ。

「弟帰ってくるまで泊めるなんて言ったら、スーリィ、怒るだろうな……」

そんなユウウツな思いが度々頭の隅をよぎりつつも、町に行く目的の方に思いを馳せると、少しだけテンションが上がってきたライムでもあり。武丸の相変わらずな自己主張もきかなかったことにして、町への道のり、残り半分の山下りを更に加速するのだった。

*

「おーっ、久しぶりだなあ、ライムちゃん！ まーた剣折ったのかあ？」
町についてから物珍しげにキョロキョロしている武丸にも構わず、ライムが一路向かった先は。
「大きさは同じくらいで、前よりも少し丈夫な剣がほしい。これで足りる？」
小銭袋をそのままドンと、この屋の主が座する木彫りのカウンターに置いた。
中身を検分しながら、鍛冶屋らしい筋肉質の体でハチマキをしめるオヤジは楽しげに言う。
「丈夫っても、これじゃ戦場落ちで切れ味皆無の、バスタードかツーハンドがせいぜいだぜ」
「わかってる。切れ味はいいから、また手抜きか失敗作でいいから新しいのにして」
「相変わらず金ねーなあ。それだけの腕がありゃ、珍獣でも賞金首でも稼ぎ放題だろーに」
オヤジはごとごとと、カウンター裏の足元に転がる剣をいくつも手にとって眺め出した。
「今度ライムちゃんが来た時になって、とってあったのがあるんだがなあ。丈夫さはピカーだけど
切れ味悪いの重い何のって。前のより更に重いけど大丈夫かあ？」
オヤジが取りだした大剣を受け取り、片手で掲げるライムには愚問以外の何でもなかったが、
「……………力いるな、これ」
そう呟きながらも、満更でもない目で上から下まで大剣を見つめる。そんな姿にオヤジは満足そ
うな顔をした後、小銭袋を丸ごと受け取るように持ち上げて、爽やかに笑った。
「これだとちょっとだけ足りないから、うちに嫁に来てくれたらまけるんだがなあ？」

鍛冶屋を出てから無言でさっさと歩いていくライムの後ろ、一連のやり取りを一しきり眺め、
不思議そうについてくる武丸が呑気な感想を口にした。
「ライムさんって、ひょっとしてモテモテ？」
「ここの町も里も、単に女が少ないだけよ」
「そうなのか……………ってことは俺とか佐助みたく、男が増えると嫌がられる？」
「……………そういうことも、なくはないだろうけど」
昨日の話もあり、武丸達をこの町の何処に放置すべきかライムも少し悩む。服装だけでも変えさ
せておかないと、スーリィのように「ヤマト人！？」と反応する相手もいるかもしれない。
なのに武丸は、これは脱げないの！ と、上着の下に鋼で出来たらしい異様な装具もちらりと
のぞかせながら、服を変えるのを断固拒否した。
「お守り失くしたら困るし、俺達の服とか買うくらいならさっきの刀の足しにしてくれよ」
これ！ と、先程の分け前のお札を返そうとしてくるが、それを受け取れば共同作業人ではなく
「師匠と弟子」になってしまうのが嫌なライムも、ぶいっと頑として受け取らない。
鍛冶屋のオヤジから結局、足りない分のお使いを頼まれてしまったライムは、町の裏山で高級
キノコを探す羽目になっていた。裏山は小魔物が多く、普通の人間は出入りをしたがるらないのだ。
「でもさ、何でそんなに新品がいいの？ 切れなくていいなら未修繕品、何か良さそうな沢山
安く売ってたじゃん」
しかも切れなくていいの？ 不思議がる武丸をうっとうしげに、ひたすらキノコを探し続ける。
「前の持ち主がいると剣から嫌がられるの」
「嫌がられる……………？」
「切れて長持ちする新品を買うお金はないし、それなら力を込めるしかないでしょ」
「??」
「リンティから教えてもらったやり方だけど……………「力を込める」には新しい方が簡単なのよ」
全然見つからない高級キノコのイライラを紛らわせるため、珍しくよく話すライムだった。
「スーリィは嫌がるけど、その方が重い剣も持てるし、そのまま剣振ったら何かスッキリするし」
ひょいっと、目の前の大岩を持ち上げたら大量の虫が潜んでいたため、ひゃっ！ とすぐに元に
戻したライムの怪力は常時ではなく、「力を込めた」ら出てくるものらしい。
「こーなると、剣を教えてもらう時は逆に力を抜かなきゃだけど……………」
「よくわからないけど、ライムさん強いし、そんなに力あるのに剣とか習う必要あるの？」
「剣術と力は全然別だし。スーリィ、ほんとに剣は強いし」
「力を込める」ようになってから、勝つだけなら人間のスーリィは相手にもならない存在になっ
たが、剣の腕自体の差は歴然としていた。風の大陸の北東端にある凍土の大国、ディレスの騎士
だったという彼女は、天才佳人剣士として持てはやされていたらしいが、
「強かったけど、長い戦争に嫌気がさして放浪したら私を見つけて、引退したんだってさ」
「えー。じゃあ俺達と似てるんじゃない、おばさん！」

「戦争が嫌だってこと？ スーリィはああ見えて千人斬りの異名を持ってるらしいから、弟子入りするならスーリィにしたら？」

うぐぐぐ。行ったこともない戦争から逃げてきた自分と、戦争に行き過ぎて嫌気がさした凄絶な人間と、比べるべくもないのはすぐに悟ったようだ。

「……俺……ライムさんみたいに、魔物も殺さないヒトの方がいい……」

しょぼんとしながらポツンと呟いた武丸の前、

「別に殺さないこともないけど……ああもう、沫茸なんて簡単に見つかるかあのケチオヤジ！」バチバチバチ！ と。大岩の側面に生える高級キノコを探すライム周囲の岩から、山里の柵の時のように火花が飛び散った。

「—！？」

またしても驚く武丸にライムは、淡々と言い捨てた。

「……これだから。死にたくなかったら、私には関わらない方がいいわよ」

「何で何で？ 今のって何か関係あるの？」

逆に近づいて袖を引っ張ってくる怖いもの知らずに、こらっ！ と焦る。

「離しなさい！ ——怒ると雷が出んの！」

「なんてなんて？ ……さっきのバチバチって、もしかして？」

「私の周りは勝手に力がこもって、バチバチなったりするように出来てんの！」

剣に対しては意識してするせいか、バチバチとなることは逆にほとんどなかったのだが。

「ひどい時はほんとに雷が落ちるから。弟子入りなんてしたら一年立たずに多分死ぬわよ」

へー……と、火花の走った岩を放心したように見る武丸から、さっさと離れたライムだったが。

「すげー……やっぱライムさん、カッコいい……！」

何故か先程まで以上に、きらきらした目でライムのことを見つめ直してきた。意味のわからない少年の反応に何でかライムはバツが悪くなりながら、高級キノコ探しを再開する。

「ところでライムさん……さっきからずっと、沫茸探してるの？」

そーよ。とだけ無愛想に返すライムに、武丸は何故か嬉しそうな顔で、両手を差し出してきた。

「——これ、献上する。俺達、こういうの探すのは日常茶飯事だから」

両の掌に確かにいくつも乗せられた質の良い沫茸に、目を丸くしてもう一度武丸を見たライムの中に。忍者イコール採集の専門家、という妙な図式がまた追加されていった。

「……」

満面笑顔の武丸の様子に、「師匠」を拒絶するためしばらく躊躇するライムではあったが、

「……まあ。昨日と今日の、宿代に頂くわ」

そろそろ帰らなければ夕飯の材料を持ち帰らないといけない時刻に間に合わなくなってしまふ。

——出来れば今日中に剣はほしいし……というライムの、それが妥協点だった。

明日には多分、大体毎日やってくるリンティが佐助を連れてまた現れるだろう。そうなれば後はもう、有無を言わず彼らを追い出せばいいだけの話だ。町の位置も今日でわかっただろうし、高級キノコをあっさり探し出せるとか、そんな得技を持っているなら、これからの生活も何とか彼らなりにやっつけていけるだろう。

—それならまあ、今日だけはまた、泊めてもいいか—

スーリィへのお土産分だけ高級キノコを差し引いてから、もう一度鍛冶屋に向かうために小さな裏山をあっさりと降り、町の裏手の広場に出たライムと武丸だった。

元々、裏手のために人気の少ない場所ではあるが、広場には全く人の姿がなかった。

—何だろ……この静かさ、何か変……—

「それにしても、ライムさん所にも細長い直刀、鏢がなくて端っこが丸いの置いてあったよな？」

他にも片手持ちサイズ一本あったのに、無骨な安物を使うのは何故？ と武丸が不思議がる。

「稽古用はともかく……あの長剣、リンティが持ってきたのよ。妖精の宝剣とか何とか言って」

「えー！ 凄そー！」

「切れ過ぎるし有り得ないくらい軽いから修行にならないし。力込めなくても勝手に火が出たり、凍ったりしてややこしいったらありゃしない」

ふつーが一番でしょ。と、ある意味説得力のないことを言うライムに、

「なるほど……刀のことは大事なこだわりなんだな、ライムさんにとって」

勝手にうんうん納得している武丸は、ライムが急に立ち止った理由にも気が付かず、懐かしそうに話を続ける。

「うちの里にも刀好きがいてさあ。もう変態としか言いようがない奴なんだけど、刀を見る目は確か……とも全然言えなくて、邪道なモノばっか集めては、奇声をあげて喜ぶ変な奴が……」

「——嘆かわしいぞ、同志武丸。里のことを軽々しく口にするだけではなく、異邦人に同志への罵倒を口にするとは……嗚呼、我ら異体同心の誓いは何処へ行った！」
その流れるような口調と着地音もない洗練された身のこなしで、「彼」はそこに降り立っていた。

＊

「うっ、うぐふおっ……！」

ライムと武丸の目の前に突如として降り立った男は、堂々と背筋を伸ばして二人に対峙した瞬間、勝手に一人で謎の擬音を口にしながら、ヘナヘナとその場によろけ落ちた。

「——？」

「うっ……うぐふっ……——美しいっ……！」

胸を押さえて苦しそうにする男に、怪訝な顔をするライムと、あちゃーと額を押さえる武丸。

「何と美しい御方を同伴しているのだ、お前という落伍者は……！ 嗚呼……まるで砥ぎ澄まされた刀の白鞘のような凜とした美しき方ではないか！」

「白鞘って……砥いでるの全然関係ないじゃん。相変わらずだな、青桐……」

それでも傍からすればライムが相当な美少女であることは、武丸も否定はしないようだった。

「何と貴様！ 異邦人の前で同志の真名を明かすとは何事だ！ この名はヤマトのためにのみ使われるものであるぞ！」

「さっきアンタも思いっきり俺のこと武丸って呼んだじゃん！」

その、青桐と呼ばれた二十代くらいに見える男は、まだ苦しそうに胸を押さえながら、片膝をついた状態で自称「切なさ」を噛みしめているようだった。

「しかしこの青桐、今後お前に連れ合いで一生勝りようがなくとも、決して使命を忘れはせぬ！」

「……アイツ、アンタの知り合い？」

世間知らずのライムでも違和感を持つような相手に、武丸がはぁ……と肩を落とす。

「さっき言ってた変態……。腕は俺達の中でもピカーなんだけど……よりによって青桐をよこすなんてなー……」

「美しき方よ、同志の戯言に惑わされるなかれ。よくぞこの青桐についてお尋ねいただいた！」

苦悩を一瞬で忘れ去ったようにスタッと立ち上がり、顔は頭巾のようなものでほとんど隠されて見えないものの、格好は武丸達とほぼ同じことはライムにもわかった。

「其れがしこそ我が里の第三の木の徒、同志青桐であるぞ！ 情けなくも里の定めより脱落し、あまつさえ逃亡を図るといふ落伍の徒、武丸と佐助に引導を渡しに参った！ ふおお！」

一息で言っただけ、言い回しはともかく内容は単純だった。

「なるほど、連れ戻しにきたってこと」

「俺より里の事話しまくってるし……」

「さぁ！ いざ神妙にするがいい、同志武丸！ 大人しくしていれば危害までは加えぬ！」

武丸に向かって片手の人差し指をばーんとつきつけて、もう片方の手は腰元で握り締めるというポーズの決まりようなど、まるで妖精の里に行った時のようなハイテンション相手の再来だった。

「また騒がしいのが増えた……」

文化としてお茶らけてるらしい妖精達より真に迫っている分、熱苦しさは上かもしれない。

「……むお？」

ライムと武丸を凝視していた青桐は、ようやく相手の状態に違和感を持ったようだった。

「待つのだ、同志武丸よ。同志佐助の姿が見えぬが、いったいどうしたというのだ？」

「あー……それは……」

「……………」

武丸が黙っててくれと言いたげな目配せをしてきたので、元々あまり関わる気はないライムは、口を挟まずに傍観に徹する。

「佐助は安全な所に預けてきた。もう里に帰す気はないから、探しても無駄だと思うよ」

「何を言うか、このうつけめが！ お前と佐助が共に失踪するなど、里の者に示しがつかぬではないか！ ……………はっ、それとも貴様……………もしやついに……！」

「違う違う、佐助はぴんぴんしてるよ。でもこのまま里にいたままだと、そうもいかなくなるし」

「——ちょっと。長くなりそうなら私、帰る」

ライムの大切な日課の一つ、夕飯の材料を仕入れて帰る刻限は当然夕飯料理前だ。今から鍛冶屋に寄って山を登ることを考えた場合、実は相当差し迫った時刻になりつつあるのだ。

ライムが場から離れようと踵を返した途端、武丸が泣きついてきた。

「待ってよーライムさん！ 俺もついてくから置いてかないでー！」

「アンタ迎えが来てるんだったら、諦めて一緒に帰りなさいよ」

「やだよそんなの、それなら最初から出てこないよ！ 俺はライムさんの所の方がいい！」

「――ななな何だと、同志武丸よ！」

歩き出そうとするライムの腕を引っ張る武丸の姿に、青桐は何故か、武丸よりライムの方を仇を見る目でギッと睨みつけた。

「美しき方よ、貴様が武丸を惑わせた元凶であったか！ その美しさならば是非もなかった！」

「は？」

「災いの芽は今ここに摘まねばならぬ！ 心苦しくはあるが、どの道我らの姿を目にし、また深く関わってしまった者の口は塞がねばならぬ！ 嗚呼ぐぬぬああ、許されよ、白鞘の方！」
科白は変だが喋りは流暢で、以後の行動も俊敏であり、突然青桐の姿は目前から消え去っていた。

「――やめろよ青桐！ 何するつもりだ！」

武丸の焦り声は一気に最上レベルになり、それを聞く前に既にライムの背筋にも、冷やりとした感覚が一瞬にして走り抜けた。

「――っ！」

全く確信があったわけではないが、悪寒が迸ったままに咄嗟に腰を落とし、前転したライムが元々立っていた場所に、光の軌跡が三回立て続けにライムの首の高さ辺りを抉っていった。

「むむむ……この青桐の刃をかわすとは、ただ者ではないな！？」

「ライムさん、よけて！」

ともすれば泣きそうに聞こえる武丸の声と迫り来る本物の殺気に、ライムの全身に緊張が走る。

騎士とは違う戦闘集団、それが忍者――……この、戦いに際して段取りも容赦のカケラもない突然の殺し合いに、その違いを肌で感じ取ったライムだった。

一先手もとれないし剣もないしって、最低！――

青桐はすぐにライムの方へ間合いを詰め、鍛冶屋で目にしたこともある短めの片刃剣、いわゆる懐刀による、首元や心臓を狙った殺しだけが目的の一撃を、遠慮なく繰り出してくる。

正直、こんなに突然殺されそうな状況になるとは思ってもみななかったライムは、ひたすら回避するのが精一杯で、青桐の一举一動に全感覚を集中させるしかなかった。

「こういう時に限って雷も落ちないし……！」

むしろ不思議な程、頭には怒りと真逆のヒンヤリとした血が、徐々に巡っていく感じだった。

「――っ！」

「ぬううお！？ 何故だ、何故に当たらないのだ！」

……何だ。私、冷静じゃないの。

攻撃を全て避けていく内、ちゃんと青桐の動きが見えてきたことにライムは気が付いた。

「す、すげー……ライムさん、青桐の攻撃、全部最低限の動きで避けてる……」

――スーリィに真剣で稽古つけてもらってたの、良かったってことかな……――

そんなことまで思う余裕が出てくる程、慣れてきたライムの動きはどんどん洗練されつつあった。

「有り得ぬぐおおお、貴様何者だ！？ この青桐をこけにするなどと！」

確かにこの五年、正確には剣を始めて四年と少したつぐらいのライムが、おそらく長く修行を続けてきた二十代のプロと相手が出来ているのは、ライム自身も信じられなかった。スーリィからライムの身のこなしは、記憶がない時代にも何か訓練を受けていたはずと言われてはいたものの。

しかしそれ以上、避けるだけのこの状態では何とも出来ない。武器を持っているプロの相手に素手で立ち向かえる程、さすがのライムも実戦経験はない。

――ああもう……剣も何もないんだから、仕方ないか……！――

このままの攻防を続けていくと、簡単に始末出来るとたかをくくっていた青桐も仕切り直して、違う手を打ってくるかもしれない。体力的にもライムの方が先に尽きる可能性が高く、とにかく何でもいから打って出ないと勝ち目はないだろう。

「って……駄目だ、ライムさん！」

体の前をかすめた短刀を青桐の右腕ごと、左手で掴んで止めたライムに、武丸が焦り声を発する。

「生憎、武器はこれだけではないわ！ ふぐはははははは！」

勝ち誇ったように青桐は、自由な左手の背の装具より、鉤爪のような刃を出現させた。そんな仕掛けなのかと感心しそうになったライムに、鋭い鉤爪が中段から胸元をめがけて襲い来る。

――とった！ と勝利を確信する青桐に、痛いだろうな――と眉をひそめたライムは……。

「ライムさん……！」

元々、何か不測の事態があれば盾にする予定だった右腕の前腕に、鉤爪が深く食い込んだ直後に。

「――痛いんだけど」

「……なっ！」

左手で掴んでいた青桐の右腕と、鉤爪ごと捉えた左手、つまり青桐の両腕を封じ込んだライムは、そのまま両手を振りかぶり、力一杯放り投げて広場の木に叩きつけた。

「——おおおおおおおあ！！」

叩きつけられる直前までそんな声が響いていたが、すぐに静寂が訪れる。

「……アイツ、死ぬかな？」

投げ飛ばした時は当然怪力バージョンだが、これだけ力を込めて攻撃をするのは初めてだった。

「……………」

右腕の激しい痛み、険しい顔で青桐の状況を確認しに近付こうとしたライムだったが、その前に武丸が駆け寄ってきていた。

「ライムさん、行こう！ あれくらいじゃアイツすぐに目を覚ますから、その前に早く！」

手早くライムの上腕にきゅっと布を巻いて、止血した武丸がライムの手を引っ張る。

「……そーね。先にとりあえず、剣を手に入れておかないと」

人間なら多分、死んでもおかしくない衝撃だったはずだが、確かに青桐は気絶しただけのようだ。

「足止め足止め……っと」

気絶している両手に懐から取り出した鎖を巻き付け、木の幹にくくりつけた武丸の姿を横目で眺めつつ、ライムは難しい顔で痛む右腕を押さえつけていた。

「……………情けないな……………あんなに力、込めなくて良かったかな……………」

「——え？」

相手を殺す可能性も承知で、ヒトならぬ力を込めて必死に対応した。そんな余裕のない状況そのものが、スーリィの教えをずっと受けてきたライムには不甲斐なく感じられていた。

それだけの力を持っているなら、どんな相手にも余裕を持って対峙出来るぐらい強くなれ。

繰り返す戦争に嫌気のさしたスーリィにとって、勝利とは生き残ることではないらしかった。一殺すだけでいいなら簡単なのよ……お互いにね。難しいのは、相手に負けを認めさせること——

「ライムさん……………」

傷ついた右腕より何より、今の勝負内容が気に食わなかったらしいライムの姿に。武丸が改めてじわーとした目で見ていることにも、気が付く余裕は今のライムにはないようだった。

*

「あんたねえ……………」

山の陽が落ちる頃、いつもより遅い時間に武丸と二人で帰ってきて、しかも右腕を負傷していたライムの姿に。やれやれと出迎えるスーリィは至って冷静そのもので、

「だから言ったじゃないの。このコ達に関わったら、まずい状況になるって」

スーリィから手当てを不機嫌そうに受けるライムを、はらはらした様子で武丸が見守っていた。

「この業界って、脱落者には厳しいのよねー。アタシも最初は何度も刺客に襲われたもんよ」

「……別にスーリィは、脱落者じゃないでしょ」

「彼らにとっては同じことなの。どんな理由であれ主君の元から離脱していく者は、裏切り者か脱落者って扱いになるのよ」

落伍者とも言うわよって武丸に対しても釘を刺して、昨日とは違う無表情で言葉を続ける。

「大体、始末するってきたのならともかく、迎えに来たなんて甘過ぎるくらいよ。そのまま引き渡すのが一番……っても、忍者相手じゃ巻き込まれた時点で無理かもしれないけどね……全く」

「……俺のせいで、ごめんなさい」

しゅんとする武丸に冷たい目は向けていないものの、言葉は淡々と厳しいスーリィだった。

「君がここにいることで、アタシ達が巻き込まれるだけじゃない。君の故郷の仲間達は、いったいどうなっているのかしら？ 誰だって戦争なんて行きたくはないけど、それが君の故郷で定められたことなんでしょう？ ……君達だけが逃げてくるなんて、彼らに悪くは思わないの？」

「……………」

「そんなの別に、逃げたい奴は勝手に逃げればいだけじゃない」

ぶすっと言うライムは別に、武丸をかばったつもりではなかった。集団行動なんてほとんどしたことのないライムには、スーリィの言わんとすることがよくわからないだけだ。

「甘いわね。本当にその定めを抗うつもりなら、里に残って仲間を集めて、定めそのものと戦うべきだと私は言っているの。逃げてきてその先、何処にこのコ達の誇りがあるのかしら？ ……まあ別に、誰もが誇りを持って生きるべきだとは、アタシは思わないけどね」

それはスーリィにとって、武丸というより、ライムに向けた言葉だったのかもしれない。

悔しそうに黙り込んで何も言わないライムの代わり、ぼつりと武丸が、ライムの包帯を巻かれた右腕を辛そうに見ながら呟いた。

「俺は……正直、よくわかんないんだ……」

「——？」

「俺達以外、戦争に行きたくないなんて言ってる奴、いなかったから……佐助だって俺についてきただけだし、本当は俺一人くらいしか、戦争が嫌だって思っていないのかもしれない……」
俺だけが弱っちいのかな……なんて、俯いて座り込んだままの武丸に、ライムとスーリィがそれぞれ思い思いの視線を向ける。ライムは理解困難そうに、スーリィは多分大人の目つきで。

「——とりあえずよ」

顔はまだ笑ってはいないものの、声からはいくらか厳しさの抜けたスーリィが、

「ややこしいことは、糖分補給してから考えることにしましょ」

ライムの手当ても終わったということで、腕まくりをして台所に引っ込んでいってしまった。

「夕飯の材料、沫茸しか渡せてないのにな……今度は何を言われるものやら」

複雑そうにライムが台所のドアを見つめる。その沫茸も武丸が元々見つけたものなので、日課を果たせなかったことが相当気になっているようだった。

「さすがにこんな状態のライムさんに、罰とかなないんじゃないの？」

「甘いわね。アンタを連れて帰ってきた件も含めて、絶対夕飯後に何かあるわ。アンタには別に何も無いとは思うけどね」

もう寝床一修行小屋一に逃げようかなと、心なしか落ち着かない様子のライムに、

「ライムさんのおばさん、厳しいお師匠だなー……でもそこまで言う事きかなきゃダメなの？」

「見習い騎士ってそういうものだって、ずっと言われてる」

「ライムさんはそんなに、騎士になりたいの？」

「別に、大して。剣を教えてもらう条件が騎士を目指すことだけ」

……と、やる気のない様子であっさり答えるライムに、武丸が大きく首を傾げた。

「見習い騎士になって絶対服従。雷一回落とすたびに厳罰。簡単に雷落としたりしないように、精神修行も兼ねたらしい仕事が最近増えたけど……それはまあ、仕方ないかな」

「何で一？ ひょっとして今日みたいなのが何回もあるの！？」

ごみ屋敷とおばちゃんという最初の苦行を思い出しながら、理不尽だあとウルウルする武丸に、ため息をつきながら視線を合わせずにライムは呟いた。

「一年前、雷落として、スーリィ殺しちゃったから」

「えっ！？」

「リンティがいたから助かったけど、ほんとに心臓、一回止まっちゃった。それからだったかな、スーリィが重罰って言い出すようになったの」

何でもないことのように言いつつ、目は合わせずに「だからスーリィの言う事はきく」と呟いているライムだったが。

「でもライムさん……そこまでして、どうして剣、習いたかったの？」

「……」

そう言われると。それ以外にしたいと思った事がなく、従って迷いもそんなになかったライムは、自分でも不思議な思いでハタ……と首を傾げていた。

「剣は習いたいけど……多分、それは……」

——強くなりたいから……？

「……今日みたいに余裕のない戦いは、基本ごめんだもの」

ぼやきながらも、どうしてこんな事を武丸と話しているのだろうと、ふと我に返って考え込んだ。

「——それって、いつかは戦うの前提ってこと？」

スーリィに雷を落としたのくだりまでは、だから自分に近づくなと言いたかっただけなのだが。

腕の痛みもあるのか、頭がぼーっとして考えのまとまらないライムは、気になっていたことに話を移した。今日はリンティもいないのによく喋るなど、自分でまずつつこみをいれながら。

「あの青桐って奴、簡単にアンタを見つけたみたいだけど、今夜でもやってくるんじゃないの？」

「ううん。足跡はちゃんと消してきたし、あの町にいたのも多分、船着き場近くのワープゲート、その出口から一番近い町を張ってたんだ。ここが見つかるにはもうちょっと時間がかかるよ」

それで帰り道は変に時間がかかったわけだった。こういう話をした時は武丸の顔も心なしか少し大人びていて、忍者というのはその手の分野に強いんだなあと、改めてライムの認識に加わる。

「でも俺、夜の間、外で見張ってるよ。おばさんに迷惑かけたくないし……」

そこに私は入らないのかとつっこみたかったが、ご飯が出来たと呼ばれてしまったため、食欲は全くなかったが一応食卓につく律儀なライムだった。

昨日に続いて気合いが入った夕飯が終わった後も、ライムは修行小屋に帰るわけにはいかなくなっていった。

「今日の罰としてあんたは明日中に、この間黒焦げにした畑にパルスリーの種をまくこと♪」

「種をまくって……まず、畑から作らないとダメ……？」

今までやった事のない作業に嫌そうな顔をするライムに、はいっと分厚い本を手渡す。

「やってみせたら一番簡単なんだけど、明日はアタシも忙しいから、これ読んで勉強して♪」

「……………」

「ああ、後、あのコの追手さんがここまで来たら厄介だから、今度はちゃんと叩きのめすのよ。

うちまで来させたら承知しないからね！ あのコ達もさっさとお引き渡しすること！」

叩きのめすが武丸達も引き渡すのかと、矛盾してるように思えなくもないが。スーリィに異議を申し立てたが最後、罰が増えるパターンを何回も味わっているライムは引き下がるしかない。

「うわ、知らない単語ばかり……それでなくても今頭ヘンなのに……」

そうして渡された本を抱えて、台所の机で開きながらも、スーリィのわか教育で教えられた言語力だと解説し切れそうになく、睡魔の襲来にウトウト船を漕ぎ出してしまった。朝に起きてから読んでいたのでは到底、明日中の畑起こしと種まきに間に合わないわけなのだったが。

「……………」

その様子を、食事部屋の床に一応寝床は貸してもらった武丸が、心配気にドア越しに眺めていた。

そんなこんなで、久々の実家泊りとなったライムは。机という寝床の不快感もあってか、浅い眠りにさまよう中でまた彼女の侵出してきた夢を見ていた。

—……うん。記憶消してやろうと思ってたけど、気が変わっちゃった—

はあ？ と思わず返しそうになったが、そういった目的である時は妖精の里まで招かれていたことを、今更ながらに夢で思い出した。

—なんで……こんなところに……？—

初めてあの少女に出会った時は、確か朝っぱらからスーリィと大喧嘩をした日で、バチバチあちこちに静電気を撒き散らしながらそれでも持て余し、気が付けば北の山まで歩いてきていた。

——尻尾が沢山ある見たことのない生き物。少女が対峙していたその生き物が、どうしてかただ、その時ライムの気に障ったのだ。最後のスイッチを押されたのかのように、立て続けに雷が生き物に向かって落ちて……何故かそこで、消えてしまった生き物はともかくとして。

ある意味当然のことながら、その生き物のすぐ近くにいた少女も雷の嵐に巻き込まれていた。

しまったー！ 我に返ったライムは、倒れている少女まで駆け寄ったのだが。少女は傷一つ見当たらないどころか、ライムが駆け寄ったらすぐに目を覚ました。一安心した様子で頭上から自分をのぞきこむライムに——瞬、信じられないような驚いた目をして、声をつまらせながら。

ごめん、苦しかった？ そう謝ったライムに何故か、少女はがばっと抱きついていった。

「……あの子だけだよな、今のところ……雷が落ちたって全然びんびんしてるやつ……」

夢現に呟いていたライムは、夢を見ているというよりも、とりとめもなく前の事を思い出しているだけの自分に気が付いた。

その後少女に妖精の里に招かれ、何やら検査もされた後、何事もなく帰してはもらったのだが。

—あなたに名乗ってもわけわからないままだろうけど……あたし、妖精のリトル・ティンカーじゃあ長いから、リンティでいい？ ときくと、少女は何故かまた声をつまらせてライムを見る。

—……もう二度と会わないから、そもそも名前、呼ばれることなんてないよ—

今の彼女からしたら違和感満点な言い草なのだが、当初はそういう成り行きのはずだったのだ。その後ライムが自力で妖精の里に迷い込み、もう一度リンティに会ってしまうまでは。

——私があんたに会いにくるの、何かそんなに問題あるの？ 不安げなリンティに軽く尋ねる。

妖精の里は基本、平和な所に見えた。それは別に、揉め事や争いが無いということではなく、問題を問題と考えない妖精達は何が起きててもそれを楽しむ性分らしい。

—あたし、嫌われてるから。ていなくらいしか話もしてくれないし、ここじゃみんな、ちょっと間違えば……気に食わないから殺しちゃいましたなんて、日常茶飯事なんだよ—

だからもう来るなど、その頃のリンティはマジメにライムを追い返そうとしていたのだが。

それじゃリンティこそ、何かあったら、私んとこまで逃げておいでよ。何の気なしに淡々と、ライムはそんなことを口にしていた。

騎士って誰かを守らなきゃいけないらしいから、めんどくさいから私はリンティでいいや、と。

何かあるとすぐ雷が落ちるライムにとって、そもそも一緒にいられる相手なんて本来はいない。「守る相手」はスーリィから一応決めるように言われて、考えあぐねていただけの話だ。

それでもその話が多分一番、まずかったんだろうなと今となっては思う。「何かあったら」どころか、それからほぼ毎日リンティはライムの元に遊びにくるようになってしまった。

—ライムぐらいの雷でダメージ受けるわけないし。あたしは妖精リトル・ティンクなんだぞ—

「魔法」という変なものが得意らしい彼女から、「力を込める」とかライムも色々変なことを教わっていった内、スーリィ曰く人間離れしてしまったらしい。ひょっとしたらそれがスーリィが、リンティを嫌う一番大きな理由なのかもしれない。

スーリィは何度も、ヒトとしてのんびり生きていけたなら、それが一番幸せよ。そんなことを言っていた気がするから。

気が付いたらライムは自分の部屋で寝ており、どうやらスーリィが運んでくれたらしかった。

頭がやたらにぼーっとするのがまだ続いている。本なんてとても読めそうにはなく、やれやれ、これでまた更に重罰追加か、なんて腐りながら簡単に水を浴び、いつもより何故かのたっとする体を鞭打ち、家を出て先日黒焦げにした畑まで向かった。

せめておぼろげに記憶の中にあった、土を掘り返して畝の形を作ってみるくらいは、やろうと思ってきたのだが……。

「あ。おはよー、ライムさん！」

朝の光がきらきらと土に反射しているような、晴れ渡った気持ち良い青空の下で。三又によりかかりながら、綺麗に起こされた畑の隅っこで休んでいる武丸がいた。

「……………へ？」

冴えない頭のまま目を丸くしているライムに、武丸が晴れ晴れとした顔で汗を拭いながら笑う。

「小屋から道具借りたよ！ 石灰はもうまいてあったから、後は種をまくだけでOK！」

「……………は？」

それでもまだ事情の飲み込めないライムの元までやってくる。

「俺達、里では普段、こういう仕事して生活してるから。手伝える事あったらいつでも言って！」

……どうやら忍者とは、採集だけでなく農耕の専門家でもあったらしかった。

「って……何でアンタが勝手に私の仕事をするのよ」

「だって俺、ライムさんの弟子だも〜ん」

ばしっ。無表情のまま武丸の使っていた手ぬぐいを取り、軽く頭をはたく。

「余計なことするんじゃないの。アンタ達には今日で出てってもらうんだから」

「でもライムさん、何か体調悪そうだよ？」

「アンタにはそんなこと関係ないでしょ。お礼なんて言わないし、弟が帰ってきたらすぐに出ていってもらうからね」

ぼやっとして他の言い回しを考えられないせいか、今日は容赦なくズバリとそう言うライムに、少しひるんだ武丸はまた捨てられ仔犬の目をする。

「……………」

綺麗に出来上がった畑を改めて見ると、どうしてか大きな溜め息が出てきた。そもそもは実は、今日はライムが寝坊してしまったことから今この結果があり。

「何なんだろうー……頭、ほんとにはっきりしない……」

動かすと痛む腕をさすりながら、後は種を撒くだけの作業なのに、畑の溝にしゃがむとますます焦点が定まらなくなってきた。

「ら、ライムさん……？」

武丸もそんなライムの異変におろおろし、ライム自身もあまりの不甲斐なさに、何だかバチバチ怒りが湧き上がってきたその時……。

「——ひっどーい！ 誰よー、あたしのライムにこんなことしたヤツー！」

良い天気っぽいハイテンションの声が響き、ライムの頭上にぼふんと彼女が現れていた。

誰があんたのモンだ！ とツッコミを返す気力もなく、ぼけっとリンティを見上げるライムの横にふわりと優雅に降り立った彼女は。すぐさまライムの右腕をがしっと掴んで、痛たたと顔をしかめているのにも構わず強引に包帯を解く。

「もう、熱だけじゃなくて毒も全身に回ってるじゃない！ ライムだから平気そうにちゃんと息してるけど、こんな怪我してただで済むわけじゃないのー！」

「あっ！」

思い当たったように今更武丸が青冷めていた。どうやら青桐の鉤爪には、何がしかの薬物が塗ってあったらしい。

「……………」

ぼんやりしながらも不服そうな顔をするライムの前、リンティは何処からか白くて長い、先端が尖って蝶の羽根のような装飾がされた棒を取り出すと。

羽根に埋め込まれた石から柔らかな光が湧き起こり、そのまま右腕のみならず全身を包んだ。

「あつっ！」

一瞬わっと顔をしかめたライムだったが、ほどなく光は右腕の傷の部分に向かって収束していき、光が消えていく頃には、傷も一緒に消え失せてしまっていた。

「……………わー……………」

一部始終を見届けた武丸がまた目をきらきらさせ、痛みも消えて頭もはっきりに戻ったライムは、右腕をぐいぐいと動かしてみながら、不調は何もないことを身をもって確認する。

「……乱暴だけど……相変わらず、やるじゃない」

「すっげー……回復と解毒、一気にやっちゃう術なんて初めて見た……」

術って何よ！ と不満そうにリンティはフワフワ宙に戻ると、先程の謎の棒は何処かに消し去り、ライムの身体に他にも異常がないか、ぺたぺた確認を始めていた。

「何でそんな怪我なんてしてたのライム。何かあったの？」

「別に、つまらないこと。剣がなかったから苦戦しただけ」

あんたが気にすることじゃないしと、傷が治って機嫌が良くなったのか、微かに笑ってすらいるライムの右腕に、えーっとしがみつくとリンティを見ていて。

「……あっ！ リンティさん、佐助はどうしたんだよ！？」

初めに問うべき事柄をようやく思い出して焦り顔の武丸に、

「あ、そっかー。向こうの小屋に置いてきたけど、ひょっとしたらまだ寝てるかも？」

呑気に答えるリンティに、修行小屋へと慌てて駆けていく姿を見送った。傷も治って、早速意気揚々と種をまいているライムには、もう武丸達の動向は全く気にならなくなっていた。

「っっ……ライムさーん、どーしよー！」

そして数分後。余程混乱したのか、お姫様抱っこで弟を抱え、走り戻ってきた武丸の姿があった。

「……………は？」

ライムはもう、全然関わる気はなかったのだが、構わずに泣きついてくる武丸の後ろで、

「——あ。ライムおねいちゃんだ」

にこにこにこと。武丸の腕から下ろされて自由になり、ライムとリンティのいる方向に笑いかけてくる佐助の姿があった。

「……………」

「おはよおー、佐助くーん。お腹減ってない？ お菓子いるー？」

「うん、ありがとー。ちょーだい、リンティおねいちゃん」

きゃっきゃっと、飴玉を渡したり受け取ったり、楽しそうにやり取りをする二人の姿に。

「……………弟。何か、丸くなったわね」

「どうなってんのー！？ 佐助が笑うなんて有り得ないしー！？」

俺の弟は何処に行っちゃったのー！？ 叫ぶ武丸にもかまわず、

「ていな・くえすと楽しかった？ まさかクリアしちゃうなんて凄いよねえ、びっくりだー」

「うん。また妖精さんの所連れてってね、ご馳走もしてね。にーちゃんも今度は一緒にいこーよ」

佐助自身は、いたって何の問題も感じてはいないどころか、ひたすら満足気だった。姿形は全く変わらず、確かに佐助少年ではあるものの、顔つきも口調も拉致前とは全くの別人さなのに。

「も、もしかして……いわゆる、妖精の取替えっ子とかいうやつ！？」

「何それ」

「俺も全然知らないんだけど、妖精にさらわれたら前とは別人みたいになることがあるって話！ どーしよー……あれ、本当に佐助なのかなー……」

「……ただ単に、妖精の里でいい思いしてきて、機嫌がいいだけじゃないの？」

その場所はまるで極楽のように、ご馳走やら娯楽が溢れかえっているというのが、スーリィ曰くの妖精伝説だった。ライムも確かに、お茶やらお菓子やら色々出された気はするが、口にしたいと思わなかったのが大して感激しなかったのだが。

「里にいる頃だって不自由はしてなかったけど……あんなに楽しそうな顔した佐助、初めてだ」
「ふーん。それじゃ、何があったのか本人にきくのが一番早くない？」
ふいっとライムは武丸に背を向けると、何の興味もなさげに改めて種蒔き作業に没頭し出した。
「もう今日からは、家にも小屋にも絶対いれないから。早く弟連れて町に降りなさいよ」
「やだよ、青桐に見つかっちゃうよー！」
知—らない。と聞く耳持たないライムに、おろおろとライム、佐助を交互に見る武丸だったが。

「——愚かな！ 見つかっていないとでも思っていたのか！」
ぶあっはっはっはっは！ 場に、滑らかでかつ威勢よく響き渡った低音の笑い声に。
「……ちょっと……」
種蒔き作業を止めて嫌そうに顔を上げたライムの前に、何かがゴロンと転がり落ちてきた。

「——ん？」
「……って——焙烙玉^{ほうらくだま}だあー！」
今までで一番焦り顔となった武丸が、ライムまで抱えてがばっと横に飛びのいた。
その取っ手のある丸い陶器には導火線がついていたが、初めて目にしたライムは爆発物だと咄
嗟に思い至れず。轟音と共に飛び散る土塊と爆風を、武丸にかばわれた体勢でやり過ごすしか出
来なかった。

「なにになに—！？ ちょっと何なのお—！？」
「に—ちゃん大丈夫—！？」
佐助と畑の外にいたリンティは突然起こった衝撃と轟音に、ライムの元へ向かおうとしたが、
「動くな！ 貴様らは既に其れがしの術中にあるのだ、ふおいやー！」
カカカッと飛来した小型で卍型の刃物がリンティ、佐助の影に命中し、二人はその場に立ち尽く
していた。

「へっ……何なの、これって……！？」
地面に突き刺さった刃物の下から突然木の根が出現し、珍しくフワフワしていなかったリンティ
の両足と佐助の片足首を拘束し、足止めされた状態となっている。

「影縫い……にしたかったけど失敗作って感じ……」
子供ながら呆れ顔で呟く佐助が、武丸&ライムを中間にしたくらいの位置に降り立った人影を見
て、武丸以上に嫌そうな顔をした。
「うわあ、いたんだ、ヘンイタイドレイ……」
「ドレイではない、貴様何度言ったらわかる！ しかし健勝そうで何よりである、同志佐助よ！」
そんなやり取りを耳にしながら、いててとすぐに起き上がれそうにない武丸をどかせ、ライムは
黙って起き上がって周囲を見回した。

「……………畑が……………」
当然のことながら、爆弾が直撃した周囲はクレーター状に吹っ飛び、そう大きい半径ではないも
のの、武丸の畑起こしもライムの種蒔きも台無しにされてしまったその状態に。

「ドレイはどうやってここがわかったの？」
「うぬぬこの不勉強者めが！ 森の同志の力を借りればそんなことは造作もな——
ぐほうあああ！ と。一瞬にして距離を詰めたライムに、武丸から取り上げた三又の裏で脇腹を
横殴りにされた青桐は、そのまま派手に放物線を描いて吹っ飛んでいった。

「——アンタ、うちの種蒔き、ど—してくれんのよ」
ぶち切れ寸前という目の座った表情で容赦なく一撃を叩きこんだライムに、佐助がぼかんと目を
丸くし、リンティはフウ……と目を細めながら不服そうに成り行きを見ていた。

「ぐううあああ……や、やるな、白鞘の方よ……………」
脇腹を押さえながら何とか立ち上がった姿に、コイツに手加減するだけ無駄だったかとライムは
改めて悟る。

「よもやこの青桐の爪を受けて生き長ら^まえるとは……さぞかし名のある鬼妖とお見受けする！」
「——は？」

この世界で土着の人間外生物をまとめてそう呼ぶのだが、その一種の少女はつまらなげに呟く。
「記憶ソーシツのライムがそんなの知るわけないじゃん」
「——名乗れぬのか？ 何と口ほどにもない！ 己が真名を口にして其れがしと正々堂々勝負す
るのがそれほど恐ろしいか、これはこれはくわはははははは！」

一人でまた盛り上がっている青桐に、つつこむ気も起きずライムは三又を肩に乗せて向き直った。
「い—からもう二度と私の前に現れるな。それともここで再起不能になってく？」

「くおおあ！ さすがにこの青桐も、四対一では不利であったか！」

いや、今相手してんの私だけだし……そう返したくはなかったが、青桐にとってはそういう状況であるのも一応理解出来た。武丸や佐助の存在はともかく、ライム的には、リンティがいる所で負ける気はしなかったこともあり。

「やむを得ぬ、ぐふぐおお！ 目覚めよ同志達よ！ この青桐の元へと馳せ参じるが良い！」
——そう言えば私、どうしてコイツと戦ってるんだ？ そんな疑問がようやく頭をかすめたが、次に訪れた異様な場面に、またしても冷静ではいられなくなったライムだった。

「やばい……口寄せだ……」

いててと爆風を受けた辺りを押さえて座り込みながら、周囲を見回して武丸が呟く。

青桐を中心としてライム達を扇形に囲むように、熊や猪、鹿や鳥など、わりと見知った動物が沢山その場に現れただけではなく。普通は動かないはずの低木の木々までが、それまで収まっていた土を引きずるように、根を足として青桐からの誘いに応えていた。

「ドレイって邪道だから、動物植物関係なく呼んじゃうんだよ」

「へー……面白いことするんだねえ、君達の一族って」

自分達の足を拘束している木の根っこを見ながら、リンティは傍観に徹している。一時的に払ったところでいくらでも次のある、簡単に解けそうな代物ではなかったらしい。

「ぐはははは！ どうだ、この青桐の華麗なる忍術の切れ具合は、ぶはははは！」

一つ一つの動物は狂ったような獰猛な目つきで、角やら牙やら爪を剥き出しに、いつでも飛びかかる態勢だった。数の多さに加えて、空からも攻撃可能などバリエーションも何気に豊富で、逃げようにも動き出した木々が堅固なバリケードを作ってしまった。

「こりゃ、攻撃魔法とか使えないとちょっと厄介かなあ……」

悩ましく両手を組むリンティに、不思議そうに佐助が尋ねる。

「リンティおねいちゃんは攻撃はしないの？」

「ちょっとねー、わけあって苦手分野なんだよねー。アイツも中々やる奴みたいねー……」

しかし、この布陣では手も足も出まい！ という以前に、青桐には別の成算があるらしかった。

「見よ、この青桐と森の同志の絆を、ぐわははは！ 傷付けられるものならつけてみるがよい！」

おーよしよしと、目つきの凶悪化した動物達を幸せそうな顔で可愛げに撫でまわし、

「魔物ならともかく、愛らしい普通の動物達を傷付けられるのか？ ……ってこと？」

その動物愛アピールの様子にうわーっと、あからさまにひいているリンティだった。

ちなみに動物と魔物の違いは、魔物は個々が世界に一匹という帰属のない変異種を指すらしい。



そんなこんなで。動植物達が現れてから、ひたすら俯いて黙り込んでいたライムだったが。

「………しまったなあ………」

ようやく一言、ぼそっと口にしたと同時に。

「——ぬうお！？」

鬼神。というのがまさに相応しい容赦なさで、三又を手に、動物の集団へと突っ込んだ。

殴っては払い、蹴っては吹っ飛ばし、徒手と三又を組み合わせた動物達との大乱闘が始まる。

「なっとなっとなあー！！ やめろ貴様あー、何をするぐおあー！」

青桐が助けに入ろうとするが、動物の数が多くて逆に入る隙間がない。

「剣を持ってくれば良かった……！ これだけいたら当分夕飯は安泰なのに……！」

致命傷を与える程に怪力を加えてしまうと、食用とするには見栄えの悪いものになってしまう。

ライムの躊躇いはその一点だけで、

「そりゃーねえ……ライムには魔物相手より、夕飯の材料の方がやる気が出るよねー……」

おーのおーあ！ と青冷める愚かな男と、半ば身一つで動物達と戦う野生少女に、アホらしー。

とリンティが呟いているような中で。

「……なっっ！？」

突然、周囲に異様な匂いが一瞬漂っていった後。乱闘していた動物達の動きが鈍くなり、鳥がばたばたと地面に落ちて、大型の獣もゆっくりと倒れ込むように動きを止めていく事態となった。

「——何？ こいつら………眠ってる？」

引っかけ傷や泥だらけになったライムが不思議そうにする前、青桐が悔しそうに歯噛みする。

「ぬおあ、よくもよくもよくもああ！ 何ということをして仕出かしたのだ、同志武丸よ！」

青桐の視線の先、座り込んだままの武丸の手には、何やら灰色の粉の入った小さな袋が握りしめられていた。

「へー……眠り薬？」

「うん。葉ならに一ちゃん色々持ってるよ」

どうやら植物には効かないようだが、動物だけが眠りについたのは、毒でも頭がぼーっとする程度のライムの耐性と、佐助達に届かないよう風向きを考えた力量と思われた。

「ぐぬぬうう、あくまで白鞘の方をかばう気であるか！ その愚かしさを後悔させてやろう！」
「……………」

心なしか顔色の悪い武丸は、何も答えずに青桐を黙って睨み返すだけだ。

「——白鞘の方、心苦しくも！ そなたはやはり真実に我が障害と認識しなければなるまい！」
「は？」

ぼろ……と、動物達の中でもみくちゃになった状態で、座り込みながら鳥を一匹掴んで検分していたライムに、青桐は思い切り指を突き付けた。

「見せしめとしてまず必ず、そなたからお命を頂戴致す！ 行くがいい、我が真なる同志達よ！」
そこでこれまで以上の異様な光景が展開していく。バリケードを作っていただけの木々が横一列の対陣となって、真っ直ぐにライムのいる方向へと向かい始めたのだ。

「って……気持ち悪っ！」

枝と枝を手を繋ぐように絡め合い、根っこを足として近付いてくる木々という通常は有り得ない光景に、さすがのライムも息を飲んでしまった。魔物や妖精の里のことなど、人間からしたら色々有り得ない状況にこれまで何度も出会っているライムにも、この光景は相当な異様さだった。

「ちょ、ちょっと……………」

それでなくても迫り来る横一列の木々が相手などと、どう対処して良いかわからないのに、異様さへの嫌悪でライムは全く動けないでいた。

「——佐助！」

「——はい」

振り絞るように大声を出して自分呼んだ兄に、木々をざっと見て意図を察してから返事の声を出した佐助は。

「ライムおねいちゃんに……近付くなーっと！」

片足を拘束されたままながら、自由な片足を使って小さな体で何とか振りかぶり、懐から取り出した大量の小さな卍型刃物を一気に投げ放った。投げ放つ間際、何故か佐助の額と両のこめかみ、顎の下に、濃い青色の左右対称な紋様が浮かび上がっていた。

標的が大きいのであっさりと刃物は横一列の木々に命中し、命中した瞬間に一瞬だけ煙に近いような暗い霞が走ると。全ての木ではないにせよ、刃物を受けた木の動きが突然止まって、枝を絡めていた他の木の前進も止められていた。

「……………ほお——？」

またしてもリンティが興味深気に、成り行きを見守る。

「なっ……同志佐助よ、貴様もか……貴様もなのかおあつ……！」

ほおうおお……！ 両手で頭を抱え、絶望したように両膝をつき、苦悩する青桐の姿に呼応するかのよう、佐助とリンティの足の拘束は解けていった。

「有り得ぬ、有り得ぬぞ我が同志達！ いや、最早同志とは呼べぬというのか……！ ぬごお！ そのような残酷な運命があっても良いものか……たった一人の魔性の女のために！」

「——魔性の女？」

ぷぷーっとついに笑い出したリンティを横目に、心なしか恥ずかしそうな顔の佐助。

「いやさ……どーでもいいから、アイツらさっさと好きに連れ帰ってよ」

「しかしこの青桐、決して自らの使命に背を向けたりはせぬ！ 何としても、どのような方法を使ってでも必ず同志達を救い出してみせるぞ……そう、世にも美しき悪魔の女の魔の手から！」
ライムの声なんて全然聞いていない青桐は、大泣きに涙を大放出させながら、場から走り去っていったのだった。覚えていろー！ に近い奇声を、よく通る涙声で叫び捨てていきながら。

「……………」

何となく誰も、しばらく何も言えないでいる程、騒がしかった存在が過ぎ去っていった後。

「……………ちょっと待ってよ………何でこうなったんだっけ？」

両手に一応食べられそうな鳥を掴みながら、クレーターの出来てしまった畑を見渡し、元凶である武丸の方へとゆっくり振り返ったライムだったが。

「——って、ちょっとアンタ？」

成り行き中ずっと座り込んでいた武丸は、青桐が去ったのを見届けてからか、倒れ込んでいた。駆け寄ってきたライムと、フワフワやってきたリンティが見守る下……。

「何、コイツ……寝てる？」

「だねえ。爆睡してるねえ」

どうやら動物達に使った眠り薬は、風向きの関係上、自分自身を外すことは出来なかったらしい。「怪我もちょっとしてるみたいだけど。さっきの変態男と一緒に、これぐらいなら大丈夫そーね」爆風をマトモに受けていた横腹には、いくらか小さな破片が突き刺さっていた。

「……そっか……元はと言えばこの畑、コイツが朝から作ってたんだっけ……」

その上そう言えば、夜間も外を見張るとか何とか言っていたなど、爆睡している武丸を見て思い出したライムだった。

「に一ちゃん、大丈夫ー……？」

「……………」

不安そうにしている佐助の手前。師匠とか弟子とか、そういうのは全く抜きにして考えてみても。

「ここで見捨てちゃ、騎士の道には反するんじゃないかな……スーリィ……」

ふうっと。困ったように腕を組みつつ、元凶は彼らとはいえ、助けてくれた少年達を見て言った。

「後一日だけは、義理で泊めてやるけど。明日は絶対出ていってもらうからね」

佐助は何も答えず武丸のそばにくっついていて。不安そうな顔には素直な心配の色こそあったものの、昨日までのような不機嫌さはほとんど見当たらず、兄やライムへの反発もないようだった。

「えーっ。後一日だけえー？」

クレーターに悪あがきを始めたライムに、何故か場を煽る事を言い出す問題妖精が約一匹。

「このコ達わりと多才だし、ライムの役に立つと思うけどなー？」

「役に立つとか関係ないし。あんたは単に、私の仕事はコイツらに任せて遊びたいだけでしょ」

「当たり前じゃん！ 大体ライム、いつも宿題ばかりでお泊りも出来ないんだもーん」

スーリィから与えられた日課は疎かに出来ないライムに、実は結構不満だったらしい。

「妖精の里に泊る気なんて元々ないけど。あのコみたいに改造されても嫌だし」

しゅんとしてしおらしい佐助を横目に言う。

「改造？ 有害成分が含まれてないか解剖しただけだよ？」

一文字違う！ と訂正するリンティに、なおのこと悪いでしょ！ と掴みかかった。

「分解して元に戻したらあーなったっつーの！？ 何考えてんのあんた！」

「あたしのせいじゃないもーん、ていな意向だもーん」

「あんたら……ヒトのこと何だと思ってんのよ……」

そのライムの科白に、ふむふむ？ とリンティは、

「何だかわからなかったから、調べなきゃって思ったんじゃない。言っておくけどあのコ達、まず間違いなく人間じゃないよ？」

「——？」

ライムはその辺興味ないだろうけどと、空中で逆さまに顔を覗き込みながら溜め息をついた。

「今日みたいなこととか絶対、ただの人間に出来るわけないんだから。人間じゃないなら基本的には、みんな何かそれぞれの力があって、有害！ 敵！ って思っただ方がいいんだけどな」非力な人間すら数の多さで有害になるんだしねと、妖精たる少女は最もらしく口にする。

「……アイツら、忍者だって言ってたから、そう考えてたらしいんじゃないの？」

「忍者なんて騎士と一緒に、誰だって名乗れるただの肩書きなんだから。問題はいったいどんな奴が、その呼称を使ってるかってことなのー」

「でも……有害じゃなかったんでしょ？」

ちょっとだけ旗色の悪くなったライムが悔しそうにそう言うと。まあねーとリンティは、佐助をちらりと見ながら不思議そうな顔をした。

「実際そんなに、大した力もなかったんだけど……何かあのコ達……」

ライムに近い感じが、するんだよねー……と。

何故そう感じるかわからないような、ぼやくような彼女の独白だったので。自分が何なのかもさっぱりわからないライムは、特に追求する気は起きなかった。

「とりあえずライム、今夜からは剣はずっと持ってなよ。あの青桐ってヒト、このコ達に比べたら何か有害っぽいし」

「めんどくさ……アイツ、寝込みとか襲ってくるかな？」

「有り得るよねえー。家には当分、帰らない方がいいーんじゃない？」

このままでは重罰も増えていく一方なので、元よりライムもそのつもりではあったが。

「……ライムのおばさん、下手したら巻き込まれて殺されると思うな。注意してた方がいいよ」

「——え？」

反転して地面に降りたリンティの口調には、いつものようなハイテンションさは欠片も見られず……ただ淡々と、ここにいない敵を見るような冷たい目つきで言葉を続ける。

「どんな方法を使ってでもって、アイツ言ってたじゃない。それってそういうことじゃない？」

「あの煩いだけの変な奴が、そんなに危険？」

確かにライムに対しては、本気で殺そうとしにきている感じはなくもなかったが。

命を狙われること自体は、今までたまに相手にしてきた賞金首や山賊からもあったライムは、あまり事態を重視していない節があった。

「さあねえ。あの二人のコ達も含めて、そこまでの力の持ち主とは思えないけどさ」

「……だったら、手段は選ばないでくる可能性もあるってこと？」

人間であるスーリィは、人間相手には強い剣士でも、「森の同志」やら奇妙な道具を使う忍者という相手には確かに無力かもしれない。今日の「対陣を組んで迫る木々」への嫌悪感を思い出したライムの中に、一抹の不安が湧き起こったのは確かだった。

「……………」

そうすると、せっかく大量の夕飯の材料が転がっているのに、これを家まで持って行くのも少し気がひけてしまった。なるべくなら家の場所を知らせないよう気を付けた方がいいのだろうか……それともここがすぐに見つかったように、それくらいはすぐ調べがつかってしまうのだろうか？

「危ないかどーかは、あのコ達にきいた方が早いんじゃない？」

ぐるぐるしてきた頭を見透かすかのように簡単に言うリンティに、こいつー……と、心を抑えずひたすらむかついていたライムは、うるさいなあと遠慮なく言い放つのであった。

そうして良いのがこのリンティという、雷が落ちてても心配しなくていい相方の特権なのだから。

＊

「へえ〜。それじゃー操ったり話したりが、君達のお里の十八番なんだあー」

さすがに四人も寝泊まりすることになると、狭苦しい上にお喋り会のような妙な雰囲気となってしまった修行小屋の中で。ライム以外の三人がひたすら喋りまくっているため、安眠を妨害されているライムの周囲には静電気が大量発生し、誰から見ても不機嫌そのものだった。

—ほんとに何考えてんだか、リンティの奴—

「それって動物相手だけなの？ それとも今日みたいに植物まで動かしちゃうものなのー？」

武丸達は気付いていないだろうが、はっきり言ってほとんど尋問、取り調べ状態だ。幼い佐助を相手では大した事はわからなかったのか、武丸に対してやたらに色々質問しまくっている。

「詳しくは言えないけど、俺は話したりする方、佐助は操ったりする方が得意かなあ……青桐は両方わりと出来るんだけどさ」

「そっかあー。じゃあアイツは、この辺の動物にきいて君達とライムを見つけたってこと？」

「そこまでは出来ないと思うんだけどなあ。青桐は自分の言う事を伝えるだけで、向こうからの声は聞こえてねーもん」

「でも、鳥とかに命令して案内させることなら出来ると思うよ」

淡々と言う佐助に、そっかと武丸は納得しながら、

「何か、一日見ないだけで随分賢くなっちゃったな、オマエ……」

「今までは言わなかったただけだもん」

元々こうだもんなんてさらりと言う弟の様子に、ははは……と苦笑うしか出来ないようだった。

「じゃあここも、ライムのおばさんの家もすぐに見つかったらかな？」

「うーん……見つけなければって思っちゃったら、命令したらいけちゃうのかなー……」

ライムの顔色をちらちらと窺いながら、躊躇いがちにごによごによ言う武丸に、

「もう見つかったんじゃない」

あっさりと断言する佐助だった。

「……………」

そしてしばらく、パチパチパチと明らかに不機嫌なライムの姿を横に、場を沈黙が支配した後。

—ボタン、と。黙って起き上がりドアを開けて出ていったライムに、武丸と佐助が顔を見合わせていた。

「——あれ？ リンティおねいちゃんは？」

「って早っ……追っかけたのかなー？」

同時に消えていた妖精の姿に、感心する武丸と何故か納得する佐助の二人だった。

—別に……心配してる、わけじゃないけど—

修行小屋の入り口の踊り場に出て、夜の冷気に一度ふるっとライムは身震いをする。

「冷えるよおー、ライムってば。今日はもう休んだ方が良くなーい？」

……パチリと。一瞬軽く雷が走りそうになったが、それは別にこの妖精に対してではなく……。

「――頭冷やしにきてんの。あんたはアイツらと好きにお喋り続けてなさいよ」

「そんなにおぼさんの事が気になるなら、逆にいっぺん帰った方がいーんじゃないの？」

パチっ。特に何処に向かうでもなく、体の周囲に一瞬だけ火花が飛び散っていく。

「別に……スーリィだってアイツらのことは厄介って言ってたんだから、危険かもしれないって
いうのは多分わかってるし」

「それなら別に、不意打ちにはされないだろーっていうこと？」

「今までだって危ないことは何回かあったし。今はむしろ、私が近付く方が危ないでしょ」

パチパチパチといつでも雷が落ちかねないような状態に、ライム自身、自分を持って余しているよ
うな様子だった。

「何でそんなにパチパチしてるのさ～」

「んなの、あんた達が騒がしいからに決まってんでしょ」

そうかなあ？ とリンティが不思議そうに、頭上から逆さまに顔を覗き込む。

「そのわりにはあんまり、怒った顔してないけどなあー……怒ってなくても出るの？ それ」

「……」

確かに、今まさにこの時の気分を考えると、怒りやムカムカというよりモヤモヤという方が
近い気がした。しかも何がそんなにモヤモヤするのか全然わからず、どうにも扱いかねている。

――仕方ないなあ、と。気持ちが高ぶる理由が自覚出来ないらしいライムを見て、リンティは
くるりと宙を舞い、ライムのすぐ横に降り立った。

「おぼさんの様子、今夜はあたしが見ておいてあげるよ。明日は修行の日なんだから、その時に
今後のことでも相談したら？」

柔らかくまっすぐにライムを見て、どーせ眠れそうにないしねと、小屋を一瞥してから笑った。

「……」

まだモヤモヤは残りながらも、珍しく含みなく笑うリンティに、何故か少し気分が和らぐ。

「……じゃ、お願いします」

「了解～。今度おぼさんの美味しいパン、分けてよね♪」

ぼふんと控えめに消えていった彼女が立っていた場所をしばらく眺めて。

あれ……とライムは、思ってもみなかった新たなモヤモヤに襲われていた。

一何なんだ？ ……何が気に入らないんだ、私は……

パチパチはちょっと治まってきたのに、それでもあまり心地よくない。自分でも首を傾げながら
小屋に帰ると、武丸と佐助がライムとリンティの分まで使って枕投げをしており、こらっ！ と
取り上げたライムだった。

不思議と、そんな彼らに対してパチパチ度が更に上昇することもなく、しかし下降してくれる
わけでもなく。この夜はそのまま不穏に過ぎていったのだった。

＊

「おはよう。それじゃこれあげるから、バイバイ」

朝になって、入口の踊り場に置いてあったスーリィ製と思われる残り物ご飯を、武丸と佐助にそ
のまま渡すと。有無を言わずライムは後ろを向いて、ごそそと出かける準備を始めた。

「えー！ 頂きまーす、けど俺達ここにいたいもん！」

「頂きま～す」

全く不満の顔をしない佐助もどういう心変わりか、それがいいと思っているらしい。

「言う事きかない奴は弟子にいないから、言う事ききなさい」

「何だよそれ、きいてもきかなくてもバイバイってことじゃん！」

「一昨日から散々、そう言ってるでしょ」

そんなの嫌だー！ と相変わらず食い下がる武丸に、ちょいちょいと佐助が落ち着いて手招く。

「兄ちゃん。こういう時に大事なのは、キセイ事実らしいよ」

「何だって？」

「……？」

まだ二人はご飯を食べていたので、時間が惜しかったライムはそのまま二人を残して修行小屋を
後にしたが。くれぐれもさっさと出ていくように！ と、それだけは何回も繰り返していった。

五日に一回、剣の稽古をつけてもらっている川岸まで足早に辿りつくと、更に早く来ていたらしいスーリィが真剣で素振りをしていた。

「お、来たわね。……ったくも一、何て顔してんのよ？」

寝不足を絵に描いたようなライムの不機嫌顔に、ケラケラと面白そうにする。

「あのコ達まだ帰らないのねえ。らしくないんじゃない？ ライム」

「……」

いつも通り黙って靴を脱いで並べ、砂利を除けて平地を作るライムにまだまだ話しかけてくる。

「あれ？ あんた腕の傷、どうしたのよ」

「……リンティが何かしたら治った」

「人間業じゃないわね、全く。あれじゃーあんたでも、一週間はしんどかったでしょうに」

眉をひそめながらもほっとしたように言っていて、複雑な心中があるらしかった。

「——お願いします」

ライムは大体長めの上着の袖を肩までまくり、下は動きやすく足首まで覆ったきつくないものを好んで着ている。川原に正座するといつも砂だらけになるが、礼から始めるのが倅だった。

「それじゃ、いつも通り……好きに打ち込んできなさい」

ふわふわの茶色い長髪を一つ括りにし、ライムと似たり寄つたりの格好のスーリィは、稽古を始めると全く笑顔が出なくなる。騎士であった頃は髪も短く、洒落っ気は皆無だったらしい。

勿論ライムは「力を抑えた」状態だが、人間に近い腕力と速さではスーリィに一撃が届いたことはなかった。大体綺麗に払われて体勢を立て直すか、紙一重で避けられる半端ない集中力を、少なくとも三時間は維持される。

—アタシは臆病者だったから、剣なんて防具としてしか使おうと思ってなかったわ。深追いもしないし必要以上の働きもしない。それだから生き残れただけの話なのよ—

それでも……と、剣を教えてほしいと頼み込んだ時に、スーリィはマジメな顔をして言った。

—剣を持って生きる以上は、「道」が必要よ。ヒトの心の脆弱さはそのまま剣に反映される……あんたはただのヒトじゃないけど、だから尚更に制御が必要だわ—

スーリィの教えの賜物か知らないが、確かに剣を握っている時には、雷が落ち難くなったような気はする。それでもライムには「強くなりたい」以外の思いがなく、どうして「強くなりたい」のかもわからない状態で——剣でなければいけないことも、本当はなかった。

—あんたが剣を習う必要あるの？ 強い存在になりたいのなら、雷を使えば話は早いじゃない—

初めはその方向だったのだ。ライムを拾ったスーリィは程なくその特異体質に気付き、山奥に引きこもり、雷自体の制御をさせようとした。と言っても人間のスーリィに出来ることとしては、雷に影響するライムの感情をコントロールという方向しかなかったわけだが。

—あんたねえ、そうやって抑えてるとかえって逆効果になんない？ もっとのびのびとやんなさいよ—。子供なんだから、感じたままに素直に喋ってみなさいって—

そもそも記憶のないライムには、感情自体が乏しかったのかもしれない。結局ライムにとっては「子供らしくする」方が難しいことを彼女は悟り、騎士として方向付ける道を思いついたらしい。その方が人類も安全よね—とか何とかのたまいながら。

——どうすれば自分が少しでも危険でなくなるかなんて、今でもライムは正直わからない。

私、強くなれるかな？ ……それとも強くなったらいけないのかな？

スーリィを傷付けないよう雷を抑えるライムが、一度だけそんな弱音を口にしたことがあった。自分に家族も誰もいないのは、この雷で消してしまったからではないか——確かに生まれた時からそんな体質であれば、赤ん坊にその制御がきくわけもなく。

それでもスーリィは、それならその年まで無事に育ってないでしょと、実に楽観的だった。

—ばーか。それがあんたなんだから才能は生かしなさいよ。ただし必ず、振り回されないで……ちゃんとあんた自身の心の制御下でね—

一番心配されていたのは、ライムには感情——心そのものが乏しくはなかったのかということ。寄る辺のない力はあらぬ方向に発散され、何かを傷付けるだけではないかと。

「何か……今日は雑念が多いわねえ、あんた」

打ち込みに切れのないライムを相手に、いつもより早く集中を解いたスーリィに、ライムも憮然としながら稽古用の剣を下げた。この程度で息を切らしてしまっているのも、今日は相当ダメだなあと自覚せざるを得なかった。

剣を地面に突き刺して座り込みながら、ライムはモヤモヤの出口を求めるように喋り出す。



「スーリィは……ぼこぼこにしても負けを認めなさそうな奴がしつこくきた場合、どうする？」

「昔だったら殺してるわね。相手にもよるけど、有害な奴だったら尚のことねえ」

「……」

「でも今は、特に失うものもないしね。暇だし負けを認めるまで相手してやるんじゃないかしら」

「暇とかそういう問題……？」

そうよーと不敵な笑顔で、ライムの少し手前に、同じような体勢で座った。

「しがらみで動いてる内は、勝手な行動するわけにいかないしね。でもアタシは基本、殺さずに勝ちたいのよね。そもそも殺してる時点で負けだと思ってるしねえ……」

「……何で？」

「相手を生かすデメリットに怯えてってことでしょう、それ。生き残れば勝ちなんて動物レベルの論理よ。メリットなんてたとえゼロでも、アタシは相手を征服してやりたいのよ」

「……」

特に表情を変えないながらも、不服そうな顔もせず自分を見ているライムに、スーリィはうふふと嬉しそうに、両膝に両肘を置いて頬杖をついた。

「あんたはこーいうアホな話、いつもバカにしないわよね」

非力な人間の妄想でドリームに過ぎないのよと、現実には何人も殺してきた彼女が虚ろに笑って呟いた。それだからこそ、願わずにはいられなかった思いを懐古するように。

「アタシのことは心配しないで、あんたは好きなようにやんなさい」

自分の身くらい自分で守るわよと、こつんとライムの額をこづく。

「……？」

「昨日の夜ねー、何か変な行商がやってきてねえ。どう見ても怪しいから笑って話を合わせておいたんだけど、アイツ相当、危ない奴よね」

「——！」

がばっと身を乗り出そうとしたライムを、どうどうと平静に額を押さえて抑制する。

「うちの家まで来させたら重罰って言ったわよね？ あんたはアイツを何とかするまで、家には入れないから、そのつもりでいなさい」

「……わかってる。でもスーリィは……」

怒ったりむかついたりしているわけではないのに、またパチパチと、体に雷が溜まりつつあった。

「見習い騎士に二言はない！ 返事はイエスのみ！」

稽古中のような遊びのない表情で一喝される。ライムがたとえパチパチしていようと、全く遠慮せずこうやってくるのがスーリィだった。

「——……っ」

よくわからない感情を持って余しながら、必死に雷を抑えるライムだったが、その額にまたするつと人差し指を当てながら、日常に戻ったお茶らけた調子で、スーリィは不思議そうに呟いた。

「また出てるわねえ、これ」

「——へ？」

「あんたが雷を我慢してる時、大体こーやって顔に、変な模様が浮かんでくるのよねえ。あんた自身には当然見えてないだろーけど……何なのかしらね？ これ」

ライムの額からこめかみ、顎の下までをなぞるように指を動かした後、ほらっと水面にライムの顔を向ける。流れがあるため中々はっきりとは見えなかったが、確かにスーリィの言う通り、深い青色の異様な紋様が、ところどころに浮かび上がっていた。

「何これっ！」

恥ずかし！ という感じで飛びすさったライムからは途端にパチパチが抜け、それと同時にその紋様も、消えたわよ〜と笑ってスーリィに窘められるのだった。

「ってこんなの……前からあったの！？」

「あったわよー。ほんとに落ちそうな時しか出ないし、すぐに消えるからアタシ以外は多分気付いていないけどねえ」

あの妖精は気付いてるかもだけどねーと、その部分はちょっと面白くなさそうに付け加える。

「……あれ？ さっきのって確か——」

ぼんやりと一瞬しか見えなかったが、似たような何かを、何処かで目にしたような気がしたのだが。そんな変な紋様が顔に浮かぶのが衝撃だったライムには、じっくり思い出す余裕はなかった。

「あ、そーそー、ライム」

おそろおそろまた水面に顔を映し、状態を確認しようとしているライムに、

「畑に大穴あけた罰として、稽古もしばらく中止よ。集中出来る状況になってから再開しましょ」その前にどっちか死んでなきやいいわねと。笑ってダメ押しする猛者には、当分敵いそうにない。

そこまで言うならと、黙ってライムは再び正座し、ぺこりと一礼すると。その日の修行は終わりを告げていたのだった———無事に再開出来る日を心待ちにしながら。

*

そしてへえーっと、姿を見るなり「どーなってんの」と怒るライムに、リンティは面白そうにふわりと数メートル前に降り立った。

「あのバカ全然、スーリィにちょっかい出してるじゃない」

「昨日の内になんて、仕事早過ぎだねえ。あたしが行く前にもう会ってたってことかなー？」

おばさん無事で良かったねえと、既にパチパチし出しているライムにもかまわず呑気に笑う。

「対ライムでの利用価値はないって判断したのかな。今後もそうとは断言し切れないけど……」

「昨日の夜は結局何もなかったの？」

「ないよー。ずっと屋根の上でごろごろしてたけど、至って平和そのものだったなあ」

言葉通り平和そうに笑うリンティを見て、そっか……と少し勢いの落ちたライムは。

「……ありがと。しばらくはスーリィのことは考えずに、修行に集中する」

「あのヒトがまたいつやってくるかだしねえ。ライムのおばさんもそれはわかってる感じだったなあ……あのコ達が全然帰ろうとしてないの、楽しそうに話してたもんねえ」

「———は？」

「朝、ライム達の所によって川原に行く前、誰かとお話ししてたよ。こんな山奥で誰とだろ？」何て言ってたの？ と訝しがるライムに、にこーっとリンティは、腕を組んでスーリィのような表情まで真似てみせてから、一息に言い切った。

「もうそりゃーあの子、えげつないったらないわよ！ 騎士の義理とか言って嫌がる男のコ達を無理やり自分の寝床へ連れ込んで、好きに言うこときかせようとしてるんだから！」

だってーと。同類だから出来るとしか思えないそっくりな口調で、くすくす笑う妖精の告げ口に。

「……………！」

ずがーん！ とシンプルに、久しぶりの雷が落ちた。標的は勿論、目の前にいた哀れな妖精で。

「うっわー……ひっさしぶりにきたあー……ヒト殺しいー！」

雷撃より轟音が耳にきたらしいリンティは、両耳を苦しげに押さえながら空中をのたうちまわる。

「……あんたはヒトじゃないでしょ、妖精なんですよ」

「妖精でも何でも、人型してる生き物はヒトって呼ぶのー！」

「ふーん。覚えとくわ」

かなりスッキリしたようなライムの表情に、もうっと不服そうな顔で背中にとりつくだけで済む、ある意味無敵の被雷針少女だった。

「あ、そう言えば……」

今もあの変な紋様は出てたのかなと、気になってリンティにもきいてはみたものの。

「青い変な模様？ 何それ？」

別にそんなの出てなかったよと、あっさり返すリンティにちょっとほっとして、それ以上考えるのはやめにしたライムだった。

そして昼下がり、修行小屋まで帰り着いたライムとリンティだったが。

「あれだけうるさく言ったし……さすがにもういないか」

小屋の中はしーんとして、もぬけの空の状態だった。

「そうかなあー？ そんなに諦めのいいコ達かなあ？」

「不吉なこと言わないでよ、ようやく静かな生活が戻ってきそうなのに」

ライムを先にどうこうと言っていた青桐が納得したかはわからないので、どの道青桐との再戦はあるとは思っているが。

小屋を見回すリンティを後に、外に出て数歩森に向かった所で、早速の彼のお出まじだった。

「——おのれ小癪な、我が同志達を何処へ隠したというのだ、魔性の女よ！」

「……………」

もう出た……と正直、その熱心さに既にめげそうなライムでもあった。

「アンタねえ……毎日毎日、他に何かすることないわけ？」

「何を言う、ぐおお！ この青桐に一時とて気の休まる時はない！ 日夜貴様らを葬り去らんと、あらん限りの手を尽くしているのだぞ！」

相変わらず頭巾の下に目しか見えていない容貌ではあるが、確かに何重ものくまが重なっていて、疲労困憊らしいことは誰の目にも見てとれた。

—アイツ邪道だし変態だしい所ないけど、とにかくいつも一生懸命なんだよな—

昨夜のお喋り会でそんなことをポツリともらしていた武丸の声が、今更になって思い出された。

「今日は森の仲間達はなし？ そんなんで私に勝てるとでも？」

稽古用の馴染みの片手剣と、町で買った新しい大剣。どちらでも好きに使えるこの状況で、ますますライムは負ける気がしなかったのだが。

「くくくく、くはくはははは！ あまり大人を見くびるものではないぞ、白鞆の少女よ！」

「——？」

その、疲れてはいるが妙に余裕に満ちた青桐の表情に、ライムの警戒心が少し揺さぶられる。

「貴様らの根城がわかった以上は、確実な攻撃手段をとるのみである。なるほどくくく、これまで其れがしは手ぬる過ぎたということだろう……こうなってしまった以上は、たとえ山一つを犠牲にしようとも最早躊躇いはしない！」

余程タイミングをちゃんと考えていたのか、その科白が終わると同時に、立て続けの爆発音が遠目に響いた。

「——……？」

直接ライムに行われた攻撃は何一つないのに、何故か嫌な感覚がライムの体幹を走り抜ける。

「く……山とは一つの異界であり、そして袋小路だ。——であればその世界を閉じてしまうのみ」

再び連続した爆発音が続き、先程よりは近い場所なのか僅かに地盤も揺らぎ、にわかに大量の鳥の飛び立っていく音や、動物達の騒ぎ声が響き出していた。

「まさか……アンタ！？」

更に響いた爆発音は今まで以上に近く、やがて現在地からも見える位置で空が赤く染まり始めた。

「ちょっとー！ 何なのよこの無茶苦茶な騒ぎはー！」

小屋から出てきたリンティがフワーと上空に舞い、起きつつある事態をはっきりと確認する。

「信じられない……アイツ、この山ごと焼き払う気！？」

ライム達的小屋があるよりも少し麓側より、同心円状に頂きに向かって仕掛けられていた爆薬は、まさに頂上に向かって次々と炎を広げていく魔の手だった。

「なっ……！」

「最早この業火に朽ちゆく山より逃れる術は貴様にはない……くふ。覚悟召されよ、白鞆の方」

「何言ってるの、これじゃアイツらとかアンタの森の仲間達だって！」

「其れがしや同志はこの程度の炎では死なぬ。森の同志達にはすまぬが、これも使命のため」

「そんな下らない理由で山一つ焼くわけ！？ ふざけるな……！」

またしても爆発音が響いていく中、大剣で青桐に斬りかかったライムにも余裕に、懐刀のみで防戦に徹する。

「所詮そなたは、刃物を振り回すだけのちっぽけな存在である。森を知り山を駆け、どのような巨大な敵であってもあらゆる手を尽くし弱点を暴く我ら木の徒に、敵うべくもなかったのだ！」

「っ……！？」

この状況に対してライムに成す術がないだろうことを、確信を持っての凶行ではあったらしいが。

「——あっそ。それじゃ、ライムの事だけ考えて満足してるアンタは……ちっぽけな刃物以下ね」とん……と。大剣と懐刀で鏝迫り合い状態の二人の横に、静かにリンティが降り立っていた。

「ぬぐう……？ 貴様……何者だ？」

昨日に色々と、敵対者を足止めした記憶はある青桐のようだが、その対象については特に問題視せず、従って追求していなかったらしい。

「ま、それもお互い様か……あたしもアンタのこと重視してなかったし。でも、個体にそんなに力を感じなくても、外付けがあるなら話は別だったかも」

「リンティ……？」

かなり近くまで赤く染まりつつある空の下……紫色に光る両の目と大きく広げられた鳥のような羽、何よりハイテンションの欠片もない冷たい口調に。ライムが逆に少し氣勢をそがれていた。

「貴様は……よもや、我が障害か？」

「そうするつもりはなかったけど。あたし達のお気に入りの山を害する奴は、別」

すうっと、ゆっくりと右手を空に向かって掲げ目を閉じ、意識を集中しているリンティに、

「ぬお、何を……！？」

本能的に危機感を持ったのか斬りかかろうとした青桐だが。当然ながらライムに止められていた。

「ヒトのこと無視出来るなんて大した余裕ね！」

「ぬうあっ……！」

本気で力を込め始めたライムの剣戟に、防戦すらままならなくなった青桐は一旦ひいて、例の卍型の飛び道具で応戦を試みたのだが、

「——遅いッ！」

地面を斬り抉って土石を飛ばし青桐の攻撃をほぼ封じたライムは、再び間合いを詰めようとした。その次の瞬間……。

ぽた、ぽたと。

赤い空の中にいつの間にか出現していた銀色の雲から、いくつかの水滴が舞い落ちてきた後。

「のあ！？ 何だ、この雨は……！？」

サァァ……と、勢いは柔らかながら全く途切れ目がない、山全体を包む規模での降水が、その雲からもたらされていた。

「……雨を呼ぶのは二番目に得意なのよね、あたし」

雨水に打たれながらゆっくり手を下ろし、顔を上げた少女の紫の目は心なしか、青い光が宿るような深い色合いにライムには見えた。

「貴様、その紫の目は……ぬおう……もしや妖精であるか？」

「何処からどう見たって、この目と耳は妖精でしかないと思うけど？」

「しかしその羽はいったい……しかもこの雨は……ぬううおおお」

それ以上青桐が何かを言う前に、黙ってライムがリンティの前に立った。

「……ふぐぐ、おのれ。仮にも妖精が黒幕であったと言うなら、我々にも考えがある！」

ひゅっと、ライム達から一瞬で大きく間合いをとった青桐は、ライムに対する時にはなかったような嫌悪を隠しもせず言い放った。

「力を独占し聖地にすら進出せんとする不屈きな妖精一派よ！ 貴様らが何を企んでいるかは知らぬが、この青桐が嗚呼、必ずや阻止する！ 白鞘の方も我が同志も貴様らの手には渡さん！」首を洗って待っている！ と、お決まりの科白を高らかに残すと。青桐は完全に消えていった。

*

「……あーあー」

妖精って何か、よそ様からは嫌われてるなあと、リンティは呆れたような顔つきで呟いていた。

「だからあんまり、手出ししなかったのになあ」

「それなら何でわざわざ、こっちまで出てきたのよ」

雨が降らせられるのであれば、離れた所で勝手に降らせてくれれば良かったのだ。リンティがそこまで出来るとはライムも知らなかったし、正直助けられたが、つっこみが先に出てしまう。

「ライムの近くにいた方が守ってくれると思ったんだも〜ん。これだけの雨を呼ぼうと思ったら、正直時間かかるし、すごい力使うし……」

言ってるそばから、突然リンティの羽の色が半透明に薄まっていき。

「——ちょっと！？」

ぐらりと足元が揺らいで両膝をついた彼女を、慌てて支えるライムだった。

「ごめーん……こっから止ませる力は残ってないやあ。しばらくちょっと、休ませてー」

あははとライムの腕を掴むリンティを、仕方ないわねと抱えて小屋まで運び込んだ。

「ライムはアイツ……どうするつもりなの？」

小屋まではわずか数十歩の距離だったが、その間にそれだけリンティは問いかけると。ライムの答えを待たずに、すーすー……と眠りについてしまっていた。

「……どうするつもり……って言われても」

すっかり静かになった小屋の中で、寝ついたリンティに布団をかけながら呟く。

問いかけの意味は、正直よくわからなくはあった。

ライムからそもそも関わった相手ではないから、どうしようという思いは初めからない。ただ、相手の出方にしたがって動いてきただけなのが今の状態で。

——と。

ゴソゴソゴソと、静かだったはずの修行小屋の中に、おそらく天井の方から異音が響いた。

「ひー、濡れる濡れるー！ もーダメー、ライムさん助けてー！」

「木遁の術、敗れるー……」

何やら、丸太の絵が描かれた敷物を体にくるみながら、小屋の屋根から降りてきたらしい二人が修行小屋に駆け込んできた。

「アンタ達……ずっと屋根の上に隠れてたわけ……？」

全体像は四角形な修行小屋の屋根は平らで、ヒト二人を乗せておくにはわけない強度があった。丸太の絵の下に潜んでいれば、空からでも注意して見なければ気付かないかもしれない。

「しかも……さっきの騒ぎは完全傍観してたってわけね、アンタら……」

パチパチと雷をまとい出して睨むライムに、

「違うよー！ 出ようとしたらリンティさんが隠れてるってー！」

「僕達に近くにこられたら邪魔だって言われたよー」

「……」

寝ているリンティと二人を交互に睨むライムだったが、やがて視線はリンティに定まっていった。

「何考えてんのよ……あんた本当」

大きな溜息をつくライムの下、小さくなって消えてしまいそうな羽を横に眠っているリンティに、武丸も申し訳なさそうな顔を向けていた。

「リンティさんの言う通り、出ても何も出来なかったけど……情けないけどさ、本当……」

「青桐の奴を説得する気とかないわけ？」

具体的に何を言いたいわけでもないが、そんな風にライムは呟いていた。

「アイツ思い込み強いから……俺達が帰るって言う以外、全く聞く耳ないだろうし。帰らないなら俺達、ライムさんが負けちゃったら殺されるんじゃないかな」

「……？」

「うちの里、そういう所は厳しいんだ。青桐だから、連れて帰ろうと必死になってくれてるんだと思う。でもさすがにアイツもそろそろ、我慢の限界にきてると思うし……」

「それじゃあアンタ達は……死んでも帰るつもりはないって所存なわけ？」

淡々と尋ねるライムに、武丸と佐助は「……」と顔を見合わせた。

「えーっと……出来ればライムさんが勝って、青桐が諦めて、追手が来なくなったらなあって」

「ウン」

「んな都合のいいことあるか！」

ぱちっ！ 何とか二人に直撃は避けられたが、火花がライムの周囲に飛び散る。

「仮に私が勝ったところで追手は今後も来るだろうし、それを全部追い払ってやる程暇じゃないわよ！ アンタ達は自分の力で出来る範囲で、今後どうしたいのか決めたらいいでしょ！」

そのまま両手で二人の首根っここの襟を掴んだライムは、ドアから外にぼーんと放り出した。

バタンと、有無を言わず、雨の中に二人を放置したはずのライムだったが。

「……って、え？」

小屋には暖炉まで備え付けてある高機能ぶりで、暖炉側の壁には全く道具を置いていないのだが。何やら違和感で満点となった壁に、つかつかライムが近付き、がばっと違和感の発生源を掴むと。

「——あ。見つかった」

「変わり身&木遁の術、敗れる……」

あの一瞬でいつ戻ってきたのか、素早さだけは神業な二人が、丸太の敷物の裏に隠れていた。

「アンタらふざけてんの……！？」

再びぼーんと放り出すも、今度は床のふりをしたり天井に張り付いたりとお腹を空かせた猫のようにしつこくひたすら忍び込んで帰ってくる。

「僕達はもうここに住んでいるのだ～」

「俺はライムさんの弟子になるんだ！」

「ああもう……アンタら……」

ライムがいない間に小屋の構造を把握して開き直ったらしい二人に、さすがのライムも疲れ果てると。リンティの看病とスーリィの様子見を条件に、雨の間は休戦協定を結んだのだった。

＊

そしてあっという間に、何故か何も起こらない雨天が何日か過ぎていった。

食材集めや畑の手入れが主な日課のライムにとって、雨の日は自然、お休みの日となる。そういう時にはここぞとばかりに剣の修行をしていたが、ここ数日は小屋に三人もの邪魔者がひしめいているため、出来る事がなく時間を持て余すしかなかった。

「つつか……雨、長過ぎ！」

どうやらリンティは、山一つカバーする雨として気合いを入れ過ぎたらしく、未だ目覚めないわ雨は細々降り続けるわで、武丸達との休戦協定も否応なしに延びる始末だった。

「山火事って下手したら何日も続くもんな……これくらいで仕方ないんじゃないかな？」

「この子起こしたらやむんじゃないの、これって」

「降らせ続けるためにおねいちゃん眠ってるの？ まさかあー」

初めの内は武丸達をガン無視していたライムだったが、時間が経つにつれ、どうしても会話が増えていくのは止められなかった。

「青桐もこれ見て恐れをなしたんじゃないかなあ。あれから全然音沙汰ないしさ」

「雨が続くくらいでどう恐れをなすのよ」

「逆にドレイ、この雨で強くなってないかな……」

その佐助の呟きの意味は、現時点でライムにわかるはずもなかったが。

「これが全部リンティさんが降らせてる雨だとしたら、相当凄と思う。天候を操るってかなり高位の力なんだって、婆様から教えられたもん」

「婆様？」

「ばあやがどうしたの？」

——はっと。武丸は気まずそうにあははと笑うと、ライムというより佐助を誤魔化すように何でもないと話題を変えていた。

「思うにさー。青桐って若手の中で一番強いから、アイツさえ追い返したら俺達も安泰な気がするー。まさか長老衆がわざわざここまで追ってくるわけもないと思うしさー」

「まだフィーとかいるじゃん、に一ちゃん」

「俺とお前が組めばその辺からは何とかなるって！」

「どっちでもいいけど、早く出ていってくれないアンタら」

色んな話のタネも必ずここに帰着するライムに、えーんと嘆きながら武丸も同じ願いを繰り返す。

「どうしたらライムさん、弟子にしてくれるのさ！」

「そもそも弟子なんてとれる身じゃない」

「そんなことないって！ あんなに強いのに！」

「どっちにしたって私、誰ともつるむ気ないし」

武丸に背を向けたまま雨の窓に頬杖をつき、壁際の長椅子に座るライムは淡々と続ける。

「アンタ達が気に入らないとかそれ以前の問題だから。スーリィの二の舞はもうごめんなの」

この修行小屋に入り浸るようになったのも、思えば育ての姉に雷を落としてからかもしれない。降り続く雨をぼけっと眺めながら、何となく思い出していたライムだった。

「でも……」

この数日は武丸達といっても、何故かほとんどパチパチすることはなかったのだが。別にむかつかうことがなかったわけでもなく、これまで通り怒ったりしていたにも関わらず。

「でもライムさん、リンティさんとは一緒にいるじゃん」

「だってこの子、雷落としたって無傷だし」

「え？ ……ほんとに？」

「多分、私より強いってことなんじゃない。身軽だし色々出来て、剣とか杖もよく振ってるし」
ええ？ とますます不可解な顔で、眠っているリンティを見直す武丸と佐助だった。

「全然そう見えねー……幸せそーで気持ちよさそーな、眠るの大好きお姫様って感じ……」

「……そーね。その子見てると何だか、和むのよね」

わりと露出の多い袖無し&生足の見える服装ながら、嫌みな色気はない平和な寝顔の美系少女。少し振り返り、無表情ながら穏やかな様子だったライムに、武丸はハッとした顔になっていたが。

「リンティおねいちゃん、またうなされてるよ」

丁度のタイミングで顔をしかめた彼女に、看病役を仰せつかった佐助が心配そうにする。

「どうせ夢の中でお腹減ったーとか嘆いてるんでしょ。ずっと絶食なわけだし」

そうかなあ……と、佐助はちらちらライムとリンティを交互にじっと見つめて。何やら首を傾げているようで、ここ数日何度も同じような挙動を見せていた。

「絶食って言えば、ライムさんって本当、全然ご飯食べないよな」

あれから今日まで、帰宅禁止をくらっているライムの代わりにスーリィの様子を見に行かせている武丸は、一日一度は何か食べ物ももらって小屋に帰ってきていた。そのツケも後で自分にまわるんだろうなと察しているライムは、全く素直に喜べないわけだが。

「美味しいのにな、ライムさんのおばさんのご飯」

「おねいちゃんは霞を食べて生きてるのかな……」

でもそんなところもすげー。と楽しそうに話す二人に、ライムは深々と心底から溜息をついた。

「何でそんなに私がいいのよ？ 私より強い奴なんて、いくらでもどっかにいると思うけど」

「ライムさんこそ罰とか色々大変なのに、どうしておばさんにずっと剣術習ってるの？」

おばさんより強い人だって探せばいるよねと、何の意図があるのか尋ね返す武丸に、うん？ と
思わず屋内を振り返る。

「ライムさんみたいに働くんなら、絶対服従なんて条件なしに剣を教えてくれる所はあると思う。
いくら何でもそれって厳し過ぎると思うし」

スーリィ自身の人柄や腕はともかく、その条件には武丸は大いに異論があるようだった。

「師匠と弟子なんてそんなもんじゃないの？」

「そんなのハンターイ！　じゃあライムさん、例えばおばさんが俺達やリンティさんを殺せって
言ったら、それも従うのかよ？」

……と。

窓枠に肘をかけて武丸を見ながら、言葉を失ってしまったライムの脳裏には。スーリィに雷を
落としてしまった時のことがよぎっていた。

—どうして—？—

どうして、リンティと一緒にいたらダメなのか——と。

—その妖精を今後家に入れるのは許さないし、あんたもその子とは縁を切りなさい—

その時のスーリィは稽古時のように有無を言わせない顔つきで、断言の理由も教えてくれずに。

しかもリンティがライムのすぐ隣にいたのも構わず、はっきりとライムにそう言い切ったのだ。

リンティは何も反論はせずに、無表情にそっぽを向いて視線を合わせずにいた。

—ライムが怒ることなんて、何もないよ—

それでもその横顔はライムには、強い痛みを必死に堪えているように見えて……気がつけば次の
一瞬、部屋全体を走る雷がライムを中心に、嵐のように吹き荒れていた。抑える暇もなかったわ
けのわからない衝動と、その後の、取り返しのつかない過ちの痛みを知るべくもないまま。

……スーリィがここからいなくなっちゃった。あの時の衝撃と嫌悪を忘れることは出来ない。
泣き叫んでスーリィを揺さぶるライムの姿に、リンティは不思議なくらいに落ち着いていた。

—大丈夫だよ。この女のヒト、まだほんとは死んでないから大丈夫だよ—

ライムの右腕を治した時のような灰白い光で、ショック状態だったスーリィを回復してくれた
リンティに、さすがのスーリィも付き合うなどまでは言わなくなると。その後もライムにその件
で何を言うでもなく、日々の生活を全く変えなかった養姉や、自分を嫌う相手でも助けた妖精の
どちらも、ライムにとっては得難いヒトだったことを——

武丸の一言で突然自覚したライムは、しばらくしてやっと、こう答えるのが精一杯だった。

「スーリィは……私が本気で嫌がるようなことは、しるって言わないもの」

結局はそうなのだ。養姉はずっと、ライムのことを考えてくれている気がするから、ライムだっ
てスーリィの言うことはきくと決められたのだ。

「——他の誰かに弟子入りなんて嫌だ。スーリィの言うことは、今までずっと納得出来たから」
大きくずれてしまったのはあの一瞬、リンティという第三者が初めて関わった時だけで。

だから武丸達を追い返そうとしているのも、多分ライム自身の心の反映なのだ。それがわかって
しまったと同時に、大きな落胆が何故かライムの中に起こっていた。

……ここ数日のこんな他愛のない話は、意外に悪くないものだったんだなと、一緒にふと思っ
たからかもしれなかった。

「そっかあ……ライムさん、おばさんのことは信じてるんだな」

「にーちゃん？」

いいな……とポツリと、その時の武丸は遠くを見るように、外の雨を両目に映して呟いていた。

「俺もライムさんみたいなヒトなら信じてついていけるのになー」

「だからそれはどーいう基準なのよ。アンタいったい、私に弟子入りしてどうしたいのよ？」

「うーん……騎士はやだけど、ライムさんみたくカッコよくなって可愛いお姫様に仕えたい！」

「可愛いお姫様ってリンティ？」

私達そういう風に見えるわけ？ と、当たらず遠からずだが呆れ切ってライムが目を細める。

「リンティさんも可愛いと思うけど、もう少しおしとやかな感じの黒髪のお姫様がいいなー」

「アホか……——弟はどうなのよ？」

「僕？　僕は何でもいいしどっちでもいいー」

わかっているのかわかってないのか、兄さえそこにいればいいという感じの佐助だった。

「……まあ何にせよ、弟子にとる気なんて全くないけど」

ええー！　とここまでの流れで少し期待していたのか、武丸が派手にガッカリして声を上げた。

「——あ、そろそろ頃合かな。俺、おばさんの所を見に行ってくる！」

何処から取り出したのか、木で出来た背の低い円錐のような雨避けをかぶって出ていく武丸に、

「そろそろあの男襲ってくるかもだし、気をつけなさいよ」
何となくそう声をかけたライムに、武丸はちょっと意外かつ嬉しそうに振り返ると。うん！ と笑い、意気揚々と修行小屋を後にしていった。

場に残ったのは、眠ったままのリンティと看病役の佐助で、もうすっかり警戒心を解いている顔の佐助にもライムは複雑そうに視線を移した。

「アンタの兄さん、よっぽど戦いに出されるのが嫌なのね」
ライムなら戦争に行けなんて言わないということなのだろうか。弟子入りしたいイコール強くはなりたいが、本音は結局それだろうか、ライムなりに考えた言い方だったのだが。

「知らな〜い。に一ちゃんいっつも、僕には何も教えてくれないもん」
「戦争が嫌なんだって言ってるの、アンタも含まれてるんじゃないの」
「嫌だけど、みんなが行けっていうなら行くよ。ここまで逃げてきたことの方がしんどいもん」
その言い草に比べて顔には特に不満そうな色はなく、現状を既に受け入れているようだった。
「ばあや達の言うことさえきいてたら、里ではみんな優しかったんだよ」
「それじゃ何で兄さんは、里を出ようなんて考えたのよ？」

「みんなは臆病者だって言ってた。に一ちゃん昔から、魔物相手にもいっつも逃げ回ってたし」
ライムを見ずにリンティから目を離さない佐助は、床に座り込みながら淡々と続ける。

「僕もよくわかんなかったけど……でもそれも違うんだなあって、この間思った」

「……？」

どう言えばいいかわからないらしく、何度もうーんと考え込んでいた。

「に一ちゃん弱いけど強くなるもん。まだ強くなかなかただけだもん」

「はい？」

「みんなが言うみたいな臆病者じゃないってわかったから。に一ちゃんも、僕も」
早くも佐助は説明を諦めたらしく、元々あまり口数の少ない者同士、それきりライムも佐助も自分からは口を開かなかった。

話をすることもなくなってしまおうと、雨の中でのあまりのすることの無さに。

ライムはいつの間にか、座ったままウトウトしてしまっていたようだった。

—こんにちは〜。ライムさんいますかー？—

呑気な声で家の扉を叩いて、出てきた女性に笑ってそんな事を尋ねる少年を夢に見る。

少年は日に何度もその家を見回りに行っていたが、一回はそうして住人に声をかけていたのだ。

—今日もまだ帰ってないわよ、君も毎日飽きないわねえ。残り物ご飯、良かったら持ってくる？—
わーいと喜んで受け取る少年に、そんな口実で行っていたのかと呆れるライムだった。

—でも君達、今は何処でどうしてるわけ？ 問題はまだ全然解決してないんでしょ？—

—はい。俺達、リンティさんのいる所で一緒にお世話になってます—

少年は何も嘘はついていないが、女性はその真意は二択から絞り切れない様子で、まさかね……と首を傾げながら少年に食べ物を手渡す。

—まさかあの子が、そこまで他人に関わりはしないわよね……—

女性は複雑そうな様子で、少年が食べ物を持って去っていくのを見届けている。その目に少年を排除しようとする意図はあまり感じられず、あの子はどうしたいのかしらねと、悲しそうな雰囲気すら漂わせているような立ち姿だった。

—だから、どうもしたくなくてないって。少し前と同じ科白を口にしようとしたライムは、一人で勝手に喋り出す前に辛うじて目を覚ましていた。

目の前には相変わらず眠っているリンティと、大人しく座ってそれを見守る佐助がいた。

「……………—あれ。雨……やんでる？」

頭のすぐ横の窓から外の景色を見渡すと、まだ薄暗いながらも雨足は遠のいている。確かめるため小屋から外へ出ようとしたライムに、佐助がぽつんと不安そうな声を出した。

「に一ちゃん、遅いな……………」

「って私、そんなに寝てた？」

雲間から光が洩れる太陽は確かに、思っていたより西よりになっている。

「アンタの兄さん……まだ帰ってきてないわけ？」

どうしてか嫌な感覚が脳裏をかすめたライムは、新しい大剣だけを片手で握むと、

「ちょっと見てくる。アンタ達はここで待ってなさい」

比較的身軽な状態で、可能な限りの早さで修行小屋を飛び出した。夢のことなんて既にほとんど覚えてはいなかったが、自分の感覚がわりと当たることがあるのは、これまで何度も体験してきたことでもあった。

……そうして、修行小屋から家に向かう道のりを丁度半分くらいは行った所で。

「———え」

胸から真っ赤な血を流し、脇道の木の根元に倒れている武丸を見つけるのに、そう長い時間はかからなかった。

頭が真っ白になってしまった。

というのはこういうことを言うのだろうか、目の状況にライムは思考を止めかけていた。バチッと大きな火花も走った気がしたが、それを気にするより前に体が勝手に動いた。自分の服の両袖を破って繋げ、血まみれの武丸の傷口を締めて、剣を持ってない方の肩で抱える。

「バカ忍者、アンタまだ生きてなさいよ……！」

息をしているかどうか確かめる余裕もないまま、この状況を唯一打開出来るはずの少女の元へと、それ以外は何も考えずに足は走り出していた。バチバチと体から果てしなく飛び散る火花が、雨上がりの水溜りをいくつも伝っては消えていった。

*

「ったく……何でこうなるのよ!？」

とにかくこの場合時間が鍵じゃないかと。武丸の体温を何とか感じながら、バチバチが伝わらないよう必死にライムは抑えつつ、全速力で修行小屋へと帰り着いた。

「リンティ———起きて———！」

青桐が挑むのはまず自分だと思い込んだせいで、ここ数日の静寂という変化を軽く見ていた事を歯噛みする程には、頭が回るようになってきていたが。

修行小屋の状況に自分の甘さを更に思い知る羽目になり、武丸を抱えたままその場で立ち尽くしてしまった。

「ちょっと二人共……何処に行ったのよ!？」

小屋は突風が通り抜けたかのように荒れていて、中で待っていたはずの佐助の姿が全くなかった。彼が見守っていたはずのリンティもおらず、頼みの綱の少女の不在に全身がぞくりと悪寒に包まれる。

——別にあたし、死んだヒトを生き返らせれるわけじゃないよと、あの時彼女は苦笑っていた。一人間って、ショック程度で心臓が止まっちゃうくらい脆いらしいよ。あたしは単に、ちょっと魔法の光でおばさんの体を刺激してみただけ——

傷を治すのは魔法の内だが、消えた命の灯を再び燈すことは出来ないのだと、そう言っていた。一回復して傷が治る時点だったら、呼吸や心臓が止まってもまだ生きてるって思っているよ。時間が経ったりダメージが大き過ぎたらそもそも治らないから。あれぐらいなら、全然楽勝——だからあんなの、殺した内に入らないよなんて、無事目を覚ましたスーリィを遠目にリンティはライムに笑いかけた。その笑顔は何処か冷たくてライムは一瞬ぞくっとしたが、それ以上に安堵の気持ちが強過ぎて、こんな思いをするのは二度と嫌だと魂の底から刻みつけられたのだ。

誰かの命を摘むのはこんなに気持ちが悪く。誰かがいなくなるのはこんなに痛いものなのだ。

「——そんな簡単に消えられてたまるか」

考え込んで立ち止まっている時間なんてない。

佐助が座っていた床に書きつけられた伝言に気付き、ライムの全身には再び火が入った。

—「山の^{ぬし}主が座する岩場にて待つ　～DREI～」—

この山に生きる者には一目瞭然の内容だが、その伝言が残された意味は正直よくわからない。

武丸や佐助を処分すると決めたなら、青桐が自分を狙う意味はもうないはずだ。それとも青桐にとっては苦渋の選択で、ライムへの復讐を考えているのか……佐助はともかくリンティの姿がないことの意味を、連れ去られたとみるべきか、その迷いがしばらくライムの足を止めた。

「でももしあの子だけでもここに帰ってきたら……コイツ……」

武丸を自分の寝床に下ろして考え込む。一刻も早く回復をさせたいと思うなら、伝言の場所へ連れていくかどうか悩むところだった。

「これ以上動かしたら余計に血が……あの子が簡単に捕まるとも思えないし……」

肩をぐっしょりと濡らしている血の量に、正直、生きているのか確認する気にもなれなかった。

「……」

もしも万一、休息中だったリンティが青桐に捕まっていたとしても、解放さえすれば瞬時に魔法でここに駆けつけることは出来る。わざわざ連れていく負担を武丸にかけるよりは、自分だけ青桐の元に急ぐ方がいい。数秒でそう思い切ったライムは、シーツを使って更にきつく武丸の傷口を締め直した後、大剣と稽古用の片手剣両方を手に、どちらにもバチバチを遠慮なく流した。

「ちょっとあのバカ探してくるから、それまで生きてなさいよ！」

武丸の方を見ずにそう言い残すと、応えは全く期待せずに修行小屋に背を向ける。

道具がいくつも散乱している中、「妖精の宝剣」が消えていることにも、その時のライムは気が付かなかった。小屋から駆け出ていく自分を見ている鳥が、丸太の屋根に止まっていたことも。

*

「山の主」と言われるとライムは一つしか思い浮かばなかったが、岩場というのも思い当るので、迷いなくその場所へと足を急がせた——そこで運命の夜が待っているとも知らずに。

双子峰と呼ばれるこの山の二つの頂の間にある、あの怪木なら確かに青桐のイメージには合う。かなり巨大なのであれを動かされると厄介ではあるが、長い雨で土も湿り、そもそも岩場なので火も回りにくい分、先日の山焼きのような凶行はないだろうと踏んだ。

それでも当然、彼にとって何がしか有利なはずの場所へ飛び込む上に、リンティ達を人質にとられているかもしれないのだから、ライムに余裕は生まれるはずもなかった。

一人質として、生きてたら幸いって話か……

武丸の血まみれの姿が何度も頭をよぎって、その度バチバチがライムの走った後を照らしていく。

—ライムはアイツ……どうするつもりなの？—

今まで、賞金首や山賊を相手にしていた時は、リンティは全くそんなことはきかなかった。

元々そうした相手は、捕まえて町の自警団に引き渡すのが定石だから、尋ねる意味もなかったのだろう。それを今回わざわざ尋ねてきたのは……ライムに、青桐を殺す意思があるかどうかということだったのだろうか。こうした事態の悪化を避けるために。

—生き残れば勝ちなんて動物レベルの論理よ。アタシは相手を征服してやりたいのよ—

そのスーリィの言葉を思い出したのが、ライムの望む形もそれに近いという事なのだろう。

—勝った負けたは何でもいいけど……もう私に挑もうなんて思えないくらいにしてやりたい—

今の平坦な毎日を乱してほしくない。それは青桐に限らず、武丸や佐助相手にですらそうだった。

雷なんて落とさずに済む静かな生活を、このまま続けて行きたいだけだと……そのためにもしも、青桐を殺さなければいけないとしたら？

その二つは本当に繋げないといけない事なのかと、この状況でもライムは、内なるリンティの声に問い返していた。その場所で青桐の変わり果てた姿を目の当たりにした後でさえも。

ライムが小屋をあけた時間を考えると、青桐もここに着いてそう時間は経っていないはずだが。

「何ここ……暗いだけでこんなに別世界になるわけ？」

ライムの身長を直径にしたくらいの大岩がごろごろしている山間の盆地、「山の主」に相応しい巨木が縦横無尽に鋭い枝を張り巡らせている、一つの異界へと足を踏み入れた途端。

「って……地震、じゃなくて!？」

足元の地面が少なくとも盆地全面で波打ち出していた。波打ち方も場所によって違うようだ。

まだ雨を落としそうな薄暗い雲に覆われた空の下、「主」の枝にも幹にもそれぞれ異様な気配が漂っており、あちこちで唐突に揺れる足場は地震というより、「主」の根が土の下で蠢いているという感じだった。

「リンティ、いるの!？」

その声に反応したかのように、ざわっと周辺の枝先が一斉にライムに向けられる。相変わらず波打ちは続いて足場も心許なく、大剣を地面に突き立てて踏ん張るライムだったが、「主」の手先達を睨み返したその先……空を埋め尽くすような枝の檻を跳び回る、小さな人影に気が付いた。

「——！」

人影は震える枝と枝の上を跳び渡りながら、手にした細長い、先端に輪のついた白銀の棒から度々

炎を舞い上がらせ、枝からの攻撃を牽制していた。

「リンティ……！」

魔物と対峙する時などたまに彼女も手にしていた、ロッドというらしい魔法用の攻撃道具を振り回して「主」の中心を目指している姿を改めて確かめ。その視線の先にある、「主」の根元に横たわる少年にも、気付かないことは出来ないライムだった。

「……！！」

武丸と同じように胸元を血で染めて倒れている佐助に、ライムは一瞬で沸点まで到達すると。

地鳴りのせいでライムの声はリンティに届いていなかったが、立て続けに「主」を直撃した雷に、ライムの存在には気付いたはずだった。枝の間を跳び抜けるのに邪魔な羽は消していた彼女が、再び羽を出して空中に留まり、あちこちを振り返ってライムの姿を探し始めた。

「来てるのライム！？ 佐助君が——……！」

「ふむ……今のは手強い。雨だけでなく雷をも司るとは、つくづく頭の痛い妖精だ」

どうやら雷の発生源をリンティと勘違いしている青桐の声が、場全体に響くボリュームで「主」の根元から聞こえてきていたが、

「ライム、どこ！？ ここアイツの気が強過ぎてわからないよ！」

その声も地鳴りに消されてライムには届かず、ライムにわかったのはただ、血まみれの佐助を前にリンティも平常心を失っているということだった。それでなくても病み上がりに近い状態で、この巨木を相手に立ち回っているだけでも相当無理を重ねているはずだった。

雷が散々直撃したはずの「主」は、元々痛覚がないことや巨体の利点で、幹の一部や枝が相当焼け焦げはしたが、活動にあまり支障はないようだ。

—とにかくあの子と合流しなきゃ！—

羽の無いライムは飛び上がっても枝に絡めとられる。リンティと同じく中心を目指すことで自分の位置を知らせようとしたライムだったが。

「——！ よけなさい、リンティ……！」

「——！？」

波打つ地上を駆け続けていたライムには、その危機はすぐに感知することが出来た。

地形の特性でいつしか溜まっていたという数々の大岩が、土の下から「主」の根に弾き飛ばされて次々とリンティめがけて打ち上げられた。ライムの全身に冷たい感覚が走り、高ぶる気持ちのままに周囲の枝へと火花が炸裂していく。

「っ、当たってよ……！！」

襲いくる大岩は今までの枝と違い、ロッドの炎で退散させることは出来ない。雷で撃ち落とすことがライムに出来れば早かったのだが、雷の矛先を制御したことの無いライムにとって、個々の大岩より今まで通りの道筋で「主」に雷が向かうのを変えることは出来なかった。

「リンティ！！」

大岩の大群に巻き込まれて見えなくなってしまった彼女の姿に、ライムはざざっと立ち止まった。

続けて何度も落ちる雷を受けながら「主」は、苦悶を表すように枝の動きを激しくさせると、動きの止まったライムをめがけて鋭い先端を何本も振り下ろす。大剣に力を込めて頭上で受け止めたライムだったが、地表から突き出した根に無防備な横腹を強打され、落ちてきた大岩群の方へと吹っ飛ばされてしまった。

「っのやろ……！」

ちょうど、リンティが巻き込まれた近くまで来れた点では良かったのだが。横腹からは洒落にならないダメージが全身に伝い、人間ならそれだけで内臓が破裂してもおかしくないレベルの衝撃だった。

「——この、この、このっ……！」

大岩を次々持ち上げては放り、それで枝も牽制しながらリンティを探すライムに——容赦のない現実が、やがて示されることとなる。

「ちょっと……——ウソでしょ、そんなの」

後数個まで大岩を放り、地面も見えてきた所で……リンティが使っていたロッドとポニーテールの先端が、残った大岩の真下から顔を出していた。その下に存在するはずの生き物は、当然押し潰されて——ぐちゃぐちゃになっていないかゾクとする状態で。

「——っ！？」

思わず、大岩をどけるのを一瞬躊躇ったライムをまたしても、枝の一閃が吹っ飛ばしていった。

「そろそろ諦めろ、異端種の少女」

大岩の所から吹っ飛ばされて、今度は何と中心まで来てしまったライムの前に。

「お前は妖精という悪しき種に踊らされていたに過ぎない。今後は大人しく山奥でひっそりと暮らせ」

その声は確かに青桐ではあるものの、テンションの高さが全く違う大人びた低音とその発生源に——ライムは半分放心しながら、現状を目の当たりにしていた。

「黙って引き下がるなら、これ以上危害を加えるつもりはない。立ち去れ」

「アンタ……青桐、なの……!？」

「確かにこの身はそうした名の男のものだが。私がこうして現界する以上、その名に意味はない」ライムの目の前、「主」の周辺には青桐の姿など全く見当たらず。

代わりに、「主」の根幹から盛り上がるように浮き出たヒトの顔——それも目と鼻を濁った緑色の石で出来たシンプルな仮面で覆われた状態で、辛うじて自由な口で喋っている何かがいた。

呆気にとられるライムだったが、容赦なく「主」の枝はライムを狙って次々振り下ろされる。最初はまだしも切れる片手剣で応戦していたライムだったが、力を込めてすらその枝達は完全には斬れず、大剣でひたすら受け流す形に切り替えざるを得なくなった。

「ヌシと一つになってるっていうの……!？」

どう見たってその光景は、木の幹にヒトが顔だけ残して取り込まれている状態だった。元々青桐の素顔も知らないので面影も測りようがないが……無表情で淡々とした口調にはヒトが違うという確信を持つしかない程、今までの青桐とはかけ離れていた。

「何でもいいけど——そこの弟を返せ、リンティを離しなさい!」

枝の執拗な攻撃にライムは場から大きく動けない上、先程の大岩の周囲や向かう道筋に枝という枝、根が絡みつけられ、容易に近付くことは出来なくなっていた。

「連れて行ってどうする。彼らはどちらも既に死に体、あの妖精にしても同じ話だ。生きて帰ることが出来るのはお前一人だけだろう」

「——————なっ……」

「私は無益な殺生はしないが、容赦もしない。お前が何処に彼らを連れていこうと、この山にある限り阻止する。青桐の身ではこの程度だが……この山中の植物が、今は私の支配下にある」ぼこっと。「主」の枝や根だけでも広範囲に渡るというのに、更にその外周——最早視認も出来ないくらいに広い範囲で、先日のように異様な木々に包囲されているのだと。

この地鳴りは山中から響いていることを悟ったライムに、さすがに戦慄が走った。

「ほんとに何なの、アンタいったい……」

見慣れていたはずの山全体をこんなに異界に変えられてしまう。それは「名のある鬼妖」ですら到達の難しい仕儀であることを知らないライムでも、相手の強大さを感じるには充分だった。

「その問いの答えを守り通すため、私はここにいる」

忍びの者として自らの正体を明かさないのは、つまりそういう事であるらしい。

「じゃあ何でリンティやアイツらを傷付けるの!？」

「それも青桐が既に説明しているはずだ。逃げ出した彼らを回収する責任がこの身にはある」

「回収って、連れ戻しさえすれば死体でもいいってこと？ 仲間なんでしょ!？」

「部外者に定めについて口出しされる謂われはない。たとえ仲間でも、世に災いを成す可能性のある者は排除するしかない——人ならぬ力を持つ者は、常にその業と共にある」

え——とライムは、青桐の淡々としながら強い覚悟の秘められた口調に、言葉を失い立ち止まる。

そんな隙を見せたライムにここぞとばかりに枝が絡みつき、大剣を手放しはしなかったものの、両手両足を拘束されてしまった。

「この力は決して、悪用されてはならない。いずれ彼らの一人がこの力を受け継げば、山一つと言わず国を横切る規模で植物達の掌握が可能だっただろう」

「アイツらのどっちかが……その力を受け継ぐ？」

「しかし第一、第二はそれを拒否した。こうした力をつけ狙う大国との戦いを前に臆した」

大国との戦い。武丸達が言っていた戦争のことだろうが、この青桐の話が確かならば、それにはこんなに異様な力を使って戦う予定だったのだろうか？

「そんなの……初めから戦いなんかじゃない……殺戮じゃないの——」

ライムの全力を込めても全ての枝は引き千切れず、断ったそばから新しい枝に絡めとられる。

「里の定めを放棄した上、最も血の濃い彼らが妖精一派の手に落ちるなどもっての他だ。妖精は他種族との安定した交流を築かず、常に身勝手に振舞う。近年では一千年を超えた災いを育み、魔の者と交流を持つとすらきく——力を手に入れるためなら禁忌を侵す災いの集まりだ」

妖精の里は、妖精だけが暮らす場所では確かになかった。飛び入りのライムや佐助でもあっさり受け入れる、異邦人嫌いが多いいこの辺りでは逆に珍しい領域なのだ。その是非なんてライムにはさっぱりわからないが——それでも、青桐+「主」の根元で横たわる佐助の元に必死に向かおうとしたリンティを、悪用目的だとコイツらは片付けるのかと。

「ただ——助けなきやって、無理するバカなのに——」

我侭なのは確かだろうが、こんな騒動に関わったせいで大岩の下敷きにされる羽目になるのだ。

ライムは全身に雷が溜まる感覚を味わいながら、逆に頭は冷めてきた状態で立ち尽くしていた。「お前も何かの力を持つようだが、この身がこの力を持ち出した以上、どんな有力な鬼妖でも勝ち目はない。自然の脅威であるこの力——自然の魂たる精霊すら超える私達にはな」

浮き出た青桐の顔の上半分を覆う仮面が、雲間から洩れた太陽の光をきらりと反射する。

地鳴りは相変わらず続いて今でも山全体が波打っているようで、その中のちっぽけな刃物一つ……相手をしなければいけないこの山に、突き立てた剣で支える体がぐらりと揺れた気がした。

「すぐに立ち去れ、異端種の少女。それでお前には静かな生活が戻ってくる」

ここに辿り着く前のライムの心の叫びを知るわけもないだろうが。青桐+「主」は、秘めた優しさすら感じさせる相変わらずの淡々声で、動けないライムを諭すかのように反応を待っていた。

絡み付く枝をほどくのを諦め、俯いたままのライムが大きく息をついた。

「……ふーん……これ、自然の脅威なのか……」

早くリンティを助けて、武丸達を回復してやらないと……不思議とその思いだけは、当たり前のようにライムの中を占拠し続けている。

でももう、目的は全部失われてしまったのかもしれない。大岩の方を堅固に囲むバリケードと、すぐ前で倒れている佐助の姿に、ライムはそれが現実であることを感じ始めていた。

武丸も佐助も既に助からない状態なら、自分が戦う必要なんてあるのか。そもそもどうして、ここまで来たのか——……彼らに関わる気がないなら、そのまま見捨てれば全て済んだはずだ。

ヒンヤリと冷めていく思考とは裏腹に、体は段々熱がこもるように汗が吹き出てきていた。

「アンタ達そんな力があつたのに、何で戦争怖がったの？ ……まだ受け継ぐ前だから？」

思考と口に出る言葉すら風向きが違っている。体は青桐に、思考は状況に、言葉は武丸と佐助に、それぞれ向けられているようだった。

—あの二人の口達も含めて、そこまでの力の持ち主とは思えないけどさ—

—に—ちゃん弱いけど強くなるもん。まだ強くなかなかただけだもん—

周囲の空気がぐらぐらと揺らぐ。何故か火花を段々と放ち出した大剣は、ライム以外から何か力を受けているかのような様相だった。

「どうやら抵抗する気力を失ったようだな。——賢明だ」

何が起きているか全くわからないライムは確かに、思考は諦観に支配されつつある。

とはいえ青桐の声なんて全く頭に入っていない。代わりに彼らからの返答が浮かんで消える。

—俺……ライムさんみたいに、魔物も殺さないヒトの方がいい—

—青桐は自分の言う事を伝えるだけで、向こうからの声は聞こえてね—もん—

「——そっか。アンタにはそれ、聞こえてるってことか……」

ふっと。彼らに会った最初から抱いていた疑問が氷解したことに、大剣を離さない手が心なしか少し握り締められていた。

「魔物も殺さないなんて相当だけどさ……喋れる相手って確かに、やりにくいよね」

弱くても強くなっても武丸は多分。なるべく傷付けるのを避けたいらしいのはわかった気がする。

——多分、いつも明るいスーリィを突然、物言わぬカタマリにしてしまったあの時の嫌な感覚。

武丸の躊躇いとひよっとしたら似ていたのかなと、ようやく思い至ったライムは思わず……

「——バカじゃないの」

それで自分が死んでりゃ世話ないじゃないと。心の底からの怒りを込めて口にしていた。

「——何だ……！？」

ライムを絡め取った枝全てから一瞬にして炎が舞い上がり、火花を散らして弾き飛ばされるようにライムからズザーっと手を引く。

「冗談じゃない……！ アンタ達年長者がしっかりしないから、アイツらみたいな子供が戦争に巻き込まれて！ 路頭に迷う羽目になるんじゃない——！」

「まさか——先程の雷はお前の仕業か！」

解放されたライムの大剣は枝にふれる度に火花が飛び散り、二、三度斜めがけに振り回しただけで、ライム周囲の枝はほとんど焼き切られていた。痛みはないが想定外の展開に、根幹の青桐が舌打ちをする。

「武器やその身に雷を纏う特異体質だと……！ ——一つ間違えばお前も世の災いになるぞ！」
「アンタ達が勝手に決めた災いなんて知るか！ 私達を巻き込んだのはアンタ達じゃない！」
根幹に向かうよりも優先はリンティだと、ライムは青桐に背を向けた。無防備な背中だが青桐は何故かすぐに攻撃せず、ただ行く手を阻む方へと枝達を注ぐ。

「まだ諦める気がないのか……何故だ？」

「当たり前でしょ！ とにかくリンティは連れて帰るんだから——あの子がアイツらも連れてくるってんならもう止めないし！」

次々と枝を焼き切って道を開くライムに言葉を選ぶ余分はなかったのか、

「これなら私、我慢する意味なんてなかった……！ アンタ達に殺させるくらいだったら、私がアイツらこき使ってやる！ アンタ達に戦争に使われるよりよっぽどマシだし！」

堰を切ったように流れ出てくる言葉に、ライム自身がまず首を傾げる始末だった。

何だそれ私そんなこと考えていたのか。その思いも取り上げる余裕もないまま、ようやく大岩まで数メートルの位置に達した所で……。

「妖精に利用された者をこれ以上害する気はなかったが……それであれば——」

ライムを憐れむような色合いすら混じらせ、溜め息をつくように青桐が大きく息をした後。

「お前達や青桐の思惑など関係なく、私のすべき事をする」

「主」の全面に一瞬、暗い煙のような霞が行き渡り。今まで以上に異様な雰囲気醸し出した大岩周辺の枝が、一斉に大岩からざざっと距離をとると——

「……——え？」

何十本もの鋭い先端が、ライムの目の前でリンティが下にいるはずの大岩を、地面まで貫通する力で砕き貫いていった。暗い霞から岩をも砕く強度を与えられたように。

「……リン……ティ？」

巻き込まれ砕けた岩々が細かく地面を埋め尽くし、岩ごと地面に刺さった枝以外は何も見えない。

それでも枝と岩の隙間をぬって、白くて長いロッドの円端だけが見えた。

その細長い物以外は全て枝に貫かれているということは……。

「……………」

ドクンと。ライムの心臓を今までにない、大きな鼓動が塗り潰していった。

「その妖精のことは調べるつもりだったが、お前がてこでも帰らないなら、仕方ない」

ライムを特異体質——災いに近いと認定しながら、手を下す気はこの青桐にはなかったらしい。

スーリィを直接巻き込まなかったことも含め、確かに彼も無闇に他者を傷付ける気はないようだ。

「—————」

でもそんなことが、今のライムに何の冷却効果があっただろうか。

——……——胸………熱い——……—

どくどくどくどく。わけのわからない熱気が胸だけでなく頭まで吹き荒れていく。

まるで心臓から全ての血流に火が入ったように、全身に回る熱気に思考が弾けて消える。

——どーしよスーリィ——抑えられない——

体が熱何こんな私やば止めなきゃ熱い許せない？止めて許さな痛い何を私そもそも怒ってた？

そして火花が何個も繋がったような光の折線がいくつも、ライムと木々の間を飛び交い始めた。

「…………——何だ？」

ハッと、そのライムの様子によりやく違和感を持った青桐だったが、時として既に遅過ぎた。

痛覚がなければ温覚もなかったことが災いしたのか。ライムの周囲気温が上昇していることを、足元の地面が乾いたことでやっと感知する。もう少し早くライムの異変に気が付いていれば、そうなる前に何か手を打っただろう——ここまで彼女に精神的負荷という力を与える前に。

ライムの脳裏をよぎるのはただ、笑っている裏で哀しさを押し殺したような顔をする少女の姿で。

——もう二度と会わないから、そもそも名前、呼ばれることなんてないよ——

そうだった、あの時私、むかついてたんだと、妖精の里を見つけ出した理由をたった今自覚した。

リンティが暗い顔をしたり、自分以外から攻撃されていると何故か腹が立つ。

——あの子のこと守ろうって、何でかそう思ったのは本当なんだ、私。

ずっと、本当に気を緩められる相手がいなかったライムの、唯一と言っていい気安い相方。

大切なものはあっても、大切だからこそ抑え続けてきた心の残骸はこうして新たな熱を呼んで、その捌け口を傷付けるものに対して牙を向くのだと……——

雷をあれだけ落として何事もなく目を覚ましたリンティを見た時の安心感は、思っていたよりずっと根の深い感情だったことも、今のライムには実感だけはあったかもしれない。

——あの子がいなくなったら——私はただのヒト殺しにしかねない——

「何だ——この、大気ごと染めていく力の連鎖は……」

強い発光でライムの輪郭すらあやふやになっており、辛うじて人影とそれが持つ灼熱色の大剣の周囲に、尚更強い光が集まっていることを青桐は確認する。

一瞬で消える雷と違い、とめどない光の折線の直撃か、気温の上昇に巻き込まれた地点では、枝も根も焼け焦げるか融解していく。しかもその範囲はどんどん広がりつつあった。

「力が力を呼び起こしている……これでは中核が止まらない限り広がる一方だな」

ざりっと青桐が顔をしかめて、根元に横たわる佐助を一瞥した後、

「——小国規模の災いの発生と認識する。この身で果たして止められるか——」

光の中でゆらりと剣を持ち襲い来る天災に、死を覚悟したような声で対峙する姿があった。

——災いっていうなら、それは初めから私のことでしょうかと。

「そんな力の使い方しか出来ないとは愚かな……！ 自らをもここで焼き尽くすつもりか！」

実際、ライムの意識なんてもうほとんど残っていなかった。

ぐるぐるする頭の中で何とかわかるのは、わりと近い時間の思い出だけで、渦巻く熱気の中でそれは辛うじてライムの自我を繋ぎ止める楔となっていた。

——あたし、嫌われてるから——

すっぱり言い切っていたあの無表情。初めの頃のリンティはライム以上にテンションが低くて、妖精の里では確かに浮いていた気がする。なのにライムの所に来る時は誰よりも妖精らしいが。

——ライムはなんで……こんなところにいたの？——

最初に会った時、別に落とした雷のダメージはゼロなのに、ずっと少女はぼろぼろ泣いていた。堪えても堪えても涙が溢れるという感じで、さすがに気になったライムが声をかけると、優しくされると余計に辛似的に頭をぶるぶると振って拒絶する。

何で泣くの？ ときくと、さっき雷で生き物が消されたことが気になるからだと答えた。

あちゃー……と。ライムはそれまで魔物に容赦などした事はなく、というよりそんな余裕がなかったのだが、その感覚で消し飛ばしてしまった生き物のために少女は泣いているのかと。

明らかに闘っているように見えはしたものの、それでも生き物を消したくはなかったらしい。余計な事してごめんとライムがまた謝ると、リンティはびっくりしたような涙顔で、

——なんで？ ライムはあたしのこと、助けようとしてくれたんでしょ？——

がっとうるのように腕を掴んできた、何処か根本的な心許なさが漂う幼い姿に。今思えばライムは、守ってあげられるならそうしたいなと……その妖精に捕まっていたのかもしれない。

——……あたしが自分でやらなきゃいけなかったの……あの仔との約束なんだから……——

そんな感じで夢現なライムは現実では、自分の姿すらわからない光の中で剣を振っている。

「主」の本体はもうすぐ間近で、このままの勢いで斬りかかればあっさり倒潰するだろう。

「——ラ……ん……！」

誰かの叫び声が聞こえた気がしたが、今のライムには目の前の敵しか見えてはいない。

「まさか、有り得ない……中核そのものが光の化身なのか！？ ——その力は……！」

全様を感じる程ライムが近くなった青桐は必死のバリケードを張るが、剣を振らずとも近付くだけで障害は焼け飛ぶか融けるかしていくので、辿り着きさえすれば全ては終わるはずだった。

……青桐の言うように、燃えていくのは周囲だけではないことや、先日の山焼きが再現されつつあることも、止める方法を知るわけのないライムが自覚していたかどうかはともかく。

青桐の間近に迫ったライムは、そのまま「主」ごと斬り捨てるため力強く地を蹴り助走する。進んで来た道は溶岩のように地面が一部融解しており、横合いから現れた人影を驚愕させるには充分だった。

「ライムさん……！ このままじゃみんな……！」

高温の中で保たれているのが不思議な大剣を振りかざし、暗い霞を纏った巨木を目掛けて天高く跳び上がり——混濁した心のまま一息でかたをつけようとした、ちっぽけな刃物のその切っ先は。

—情けないな……………あんなに力、込めなくて良かったかな—

少し前にそう思った自分自身の心を、ふっと思い出した雑念が幸いしたのだろうか。

「やめてくれライムさん……！！」

「主」とライムの間に飛び出し、全身を盾にして止めようとした少年に何とか気付いて、咄嗟に無理な方向へ光の塊状態のまま反転したライムは。

体勢の無理から大剣を手放してしまい、そのせいで大剣に注がれていた力が周囲に溢れ、いっそう激しい光がバチバチと舞い狂った。

「ライムさん、元に戻ってくれ！ このままじゃ佐助も青桐も融けちゃうよ！」

「退け、第一！ お前に止められる相手ではない！」

これまで声を出す余裕もなかった青桐が少年を叱咤している。

「やだよ、青桐だってライムさん達を殺す気だ！ そのためにそんな物まで持ち出してきて！」

「あれを見て事態がまだわからないか、お前は！」

「こんな事してちゃ青桐だって体持たないだろ！ 俺達のせいで誰かが死ぬなんて嫌だよー！」
いくつか光が掠めて焼け焦げが出来た少年の姿に、力は治まらないものの、前進だけは止まったライムに。少年……まだ胸元は赤く染まったままの武丸が、必死の表情で更に訴えかけた。

「青桐はあの仮面で変になってるだけなんだ！ あれをつけると俺達みんな、自分の意思も関係ない化け物になっちゃうんだよ——！」

だから殺さないでと、ライムと青桐の間に大の字になって留まり続ける武丸に。

—……………って……………—

ふっと。光の塊の中で人影がにわかに濃くなって、いくらか輪郭が取り戻されていた。

— あの 仮面を つ けて 、 変 に な っ た ？ —

決死の表情で立ちはだかる武丸に対して、ライムはそのつつこみを抑えることは出来なかった。

— 「どう考えてもつけてる方がマトモでしょうがソイツ——！！」 —

ヒトの言葉を、ヒトに届く形で発することが出来た程度には、光の収束が始まっていた。

「ライムさん……！？」

ヒトの形に収まりつつある光の中、左右対称の青い紋様が、頭の辺りに浮き上がっていた。顔がはっきり戻っていれば、こめかみから額にかけての位置だっただろうことを、武丸と青桐は共に間近で確認することになる。

「——まさ、か……………」

本当に……？

放心したように口にした青桐の隙を、武丸は見逃さずに緊迫した顔つきで行動に出ていた。

「——っあああああああ！」

「がっ……！ お前……！」

振り向きざまに「主」の根幹、青桐の浮き出た顔を斜め下から、大きな釘のような短刀で一気に切り上げる。

——正確には、ぎりぎり青桐の仮面だけをかすめて。

がきんと金属同士がぶつかるような音をたてて、緑の仮面は青桐の顔から弾き飛ばされていった。上手くいくか武丸は痛く不安だったようだが、あの体勢と速さで仮面だけを飛ばした技量はおそらく大したものだったろう。

まだ全身は光に包まれていて揺らぐライムだったが、意識は夢と現実の間を交差し始めており、やるな——……と思えるくらいには、クールダウンが起きつつあったその状況で。

ばさばさばさっと、あちこちで地に伏す動いていたはずの木々と。「主」に取り込まれたように見えていた青桐が、その全身を「主」から吐き出される事態が併せて起きていた。

「——っ！？」

「あ、やべっ！」

仮面を飛ばした後にへたっと崩れていた武丸は、己が引き起こした事態に思い当って慌てる。

ライムはまた喋れなくなるくらい瞬時に沸騰しながら、頭はさーっと凍りつくという、世にも異常な感覚を味わうこととなった。

「て……………って……………！」

「——ふむむ……。前回の手合わせから僅かな期間であったが、腕を上げたな、同志武丸よ」
……サァァ、スタ——っ。「主」と分離して全く悪びれもなく場に降り立っていた青桐の姿は。

「何でまた全裸なんだよ青桐はいつも！ 別に服脱ぐ必要ないだろ！」

「この方が繋がりやすい気がするのである。非才故の痛ましき工夫である」
多分一般的には均整のとれた美形で、生まれたままの姿で仁王立ちしている姿を正面に、灼熱のせいだけでなく赤くなっていたかもしれないライムは、
「——このっっ、ヘンタイ変態忍者おとこ——！！」
ともすれば今までで最大限の規模の光を大放しさせると。その全てがまず上空に向かってから華々しく拡散し、雷とも火花とも言い難い光が地上に降り注いでいた。

光を伴う衝撃波のほとんどが命中して吹っ飛ばされた青桐を見届けた後。あー……と武丸が、まだ光に包まれているライムの方へ、もう一度振り返ろうとした時。
唐突に、ある意味一番危機感を持った叫び声が、場に響き渡っていた。
「だめェーっ！ 変に戻ったら今はライムまで裸んぼさんー！」
ばしゃーっ！ と。滝のような水がまだ発光しているライムに強烈に降り注ぐ。
何の魔法か、元々着ていた服と同タイプではあるが確実に違う物を一瞬で着せられ。水がひくと同時に発光も治まりぺたんとして座り込んでいたライムは、ポカんと全身を見回していた。
「あんな高温で服とか無事に残ってるわけないでしょ！ その辺考えて力収めてよライムは！」
「え……リン、ティ？」
そういえば、武丸？ と、佐助を抱き起こして何やら粉薬をかけている武丸も含めて。やっと現実という感じで、周囲にいる者達の存在をライムはのみこんでいた。

「あんた達……無事なの？」
今まではまるで、自分が死んで彼らがいる所に来たのかと思ったくらい全てあやふやだった中で。心配を隠さないライムに伝えるように、武丸は粉薬をしまってから何やら小さな袋を取り出し、佐助の頭上にかざすと——
「…………あれ？ ……………にーちゃん、おねいちゃん…………？」

佐助の胸元に、先程まであったはずの傷は小さくなり、何事もなかったかのように目を覚ましていたその姿に。ひとまず彼らが健在であることは、よくわからないが受け入れたライムだった。
「何だ……武丸も佐助も丈夫なんじゃない。……心配することなかったわけ——」
「そんな事ないよ、お守りなかったらほんとに死んでるから。しかも凄く痛かったし……」
青桐は俺達、死んだように見せかけたかったみたいだけど……と。複雑そうに武丸は倒れている背後の男を振り返っていた。

「このお守り、次にまた使えるまでは時間かかるから、今回こんな使ったのは相当痛いんだけど」
小袋をむーと眺めながら、重さを確認するかのような武丸の素振りだった。

ところで……と。肝心の相手の方へ座り込んだまま顔を向けたライムは、
「——あんた、今までずっと生きてたの？」
私さっきワケわかんなくなった理由って何だったって、恨めしそうにリンティを見たものの。
「何それ意味わかんない。ひょっとしてライム、あたしがあの程度の攻撃でやられたと思った？」
あたしは妖精リトル・ティンクなんだぞ！ と。雷が落ちてでもへっちゃらな不死身少女は、でもじゃあ何処にいたの？ と納得いかないらしいライムを前に、ロッドを何故か黙って掲げた。

「あれ……？ 何かあんたも何か服違わない……？」
「うん。だってずっと着たきりで、ここで更に汚れたから着替えたよ。ていうか、散々ライムのフォローしてまわった身にもなってよホント」
見れば、ライムの光が広がった山野に、先日よりは狭い範囲で繊細な雨が降り注いでいる。不在の理由には少し強引な気もしたが、今こうして少女と話せているのが何よりの答えなのだ。

ライムはふう……と、やっと少し緊張を和らげるように、大きく息をついた。
「……で、また雨降らせたってことは、大丈夫なのあんた」
「うーん……雨だけじゃなくってさすがにちょっと、疲れはしたかな」
ちらりと、武丸と佐助が介抱している青桐の姿を見て、今までと一転した無表情になった彼女は、
「アイツと話したくないから、あたし帰る。——サヨナラ」
「——へ」

大丈夫なのか気になったライムが引き止める暇もなく、いつものような爆音もたてず、場から唐突に消えてしまった。

「…………何か…………」
雨を呼んだ後すぐに倒れ込んだ先日とは違って、疲れたと言いつつ今日は意外に気丈ではないか。というより、表情は柔らかかった前の雨の時とは違い、何処か妙に張りつめていた気がして。
滅多にきかないサヨナラなんて捨て科白も含め、何故かライムは胸騒ぎがし始めていた。
が、こちらのそんな状況はお構いなしに。

「——嗚呼どうか、これまでの無礼をお許しいただきたい……我らが祖と同格の伝説の主よ」その声に否応なく再び緊張の火を入れると、武丸達に全身布を巻かれて目を覚ましていた青桐の方へと、ライムは嫌々顔の向きを変えた。

「知らぬこととはいえ数々の大変な失礼を働き、我が事ながら万死に値する。うぐぐぐぐぐ……。しかし伝説にきく主の裁きなら何であろうと、この青桐は有り難く受け入れ申す所存」

「……あるじって？」

しかも伝説？ 跪いて畏まりわけがわからないことを言うが、元々青桐はそんな奴だったかもと追求はやめたライムに、そのままの調子で彼は続ける。

「主にであれば、我が里の次代の担い手をお任せ出来る。ふぐ……どうか第一と第二の木の徒を、天の君の元で何卒お鍛えいただけまいか」

「……てんのきみ？」

正直まだ立ち上がるのも辛く、つつこむ気力は残っていないライムに代わるように、辺りをきょろきょろしている佐助が珍しく自分から喋り出した。

「ねー。ドレイの仮面、探さなくていいの？ うちの里の宝なんでしょ、あれって」

「オマエ……それ、どこで……」

驚く武丸に何でもないことのように佐助は答える。

「ていな・くえすとでにーちゃんがラスボスで付けて出てきた。別人みたいでカッコ良かったよ」

「どーいう意味だそれ……」

色んな意味で不本意らしい武丸だったが、黙り込んだのにも色んな意味があるようだった。

「ふふふはははは。心配いらぬ、其れがしが必ず里へと送らせておく。お前達二人はここで来るべき日まで、自己研鑽に励むのだぞ」

「え、青桐……それって——」

「ただし決して、妖精の手には落ちるな。天の君もお前達が妖精の魔の手からお守りするのだ」いつからそうなったのか、最早自分の敵は妖精だけだという勢いの青桐がまだ、ライムは気に食わなくはあったが。

ざざざ……と、一瞬にして雨風と共に消えてしまったのを呼び戻す文句はすぐには浮かばず。残された武丸と佐助と三人で、ただの巨木に戻った「主」の前、しばらく座り込んだままでいた。

「何か……凄い惨状になっちゃったけど……ライムさん、大丈夫？」

焼き野原に近い勢いで土も木々も焼け焦げ、もしくは融解した辺り一帯に、今更ながらに武丸が茫然と呟いていた。

「アンタ達こそ、傷はどうなのよ。さすがに完治はしてないんじゃないの」

「うん、でも何か少しマシ。多分この雨のおかげだと思う……水は大体、俺達には味方だから」既にびしょ濡れ状態の三人は特に気にすることもなく、しばらく柔らかな雨に打たれ続ける。

「リンティおねいちゃんは大丈夫かな……」

その佐助の呟きに、回答者不在でしばし場は沈黙に包まれたが、

「でもライムさん、やっぱり凄いよな。あの青桐を、しかも全力なのを撃退しちゃったんだから」あれだけ異常な姿だったライムを目の当たりにして尚、そんな呑気なことを言って笑う武丸に、バカとしか言い返せないライムだった。そんなやり取りを、始終瀕死で状況を見ていない佐助は不思議そうにしていた。

「……とりあえず、傷が治るまでは帰って休むわよ。ついてきなさい、武丸、佐助」

やれやれと何とか立ち上がって手を伸ばすライムに捕まり、痛たと立ち上がった二人は、ライムの後ろ姿に一度だけ兄弟で顔を見合わせて——嬉しそうに笑った後に、必死で後を追うのだった。

*

「……………」

……と。何度も顔をしかめて寝返りをうつライムを、周囲に座る三人が心配気に見つめた。

今まで有り得なかったレベルでフル回転させた心身には、思っていた以上に強い疲労が溜まっていたらしい。修行小屋に帰ってから三日連続眠り続けたライムの苦しげな寝顔に、武丸と佐助はスーリィまで呼んできて、ついでに自分達も手当てをされる始末だった。

「何だかえらくうなされてるわね、この子……悪い夢でも見てるのかしらね」

不調なのはライムだけでなく、武丸と佐助の傷の治りも、里にいる頃に比べると少し遅いらしい。

暗い面持ちの二人にスーリィは明るく相変わらずに接する。

「やっぱり君達とライム、相性悪いんじゃないかしら？ もう帰ったら？」

「里公認で弟子入りするって決めたんです！」

「……それ、多分無理だと思うけどねえ」

面白そうにライムと彼らを交互に見つめてハッキリ言いつつも、

「でも、うなされてるわりに今日はパチパチしてないわねえ、そう言えば……」

それが、かの少女が彼ら二人を、いつ暴発してもおかしくないライムのそばにおこうとした本当の理由であることを——今はまだ誰も知る由もない。

—
暗い森のような所で、ライムはひたすら、全身の痛みをこらえるようにうずくまって息を荒くし。コントロール出来ない力の代償を、甘んじることも出来ずに受ける自身を体験していた。

多分、あまりに力を使い過ぎて、そして身体も痛めつけられ過ぎてしまったのだ。

—このままじゃもう抑えられない——助けて、誰か——……—

その先にある破局は先日はたまたま、止めに入ってくれた者がいたから避けられただけの話だ。彼らと力の相性が悪い自分は、削り合っただけでようやく力を抑えられるか、逆に誘発されるかの二択。

自分の中に渦巻く何かが、その力を解放して楽になってしまえと囁き続ける。

—そんなのは嫌……せっかく、ここまで、守ってきたのに——……—

けれど、そうしなければ今のあの生活も続いてはいかないのだろうと。

直接心身に刻み込まれた痛みは、何よりも生存本能に働きかける。抗えない程の激情が生まれてしまう。そうした思いに自らを失うのが、結局は一番怖かったのか……だからずっと、一人で心を抑えてきたのに。この夢ではその結果も見せつけられて、気分が悪いことこの上なかった。

「……それでは確かに再び、そなたに託したぞ」

鳥のようなモノに向かって話しかけている青桐が見える。

「—ああ。詳細は其れがしが帰ってから皆に説明致そう」

例の仮面を括りつけたモノを空に放つと。消耗し切った表情ながら、再び懐刀を手にして言った。

「さて……残った使命を、果たさねばなるまい」

その辺りは何の害もない夢なのに、その後何度も再生されるのは青桐の無残な死態ばかりで。

長い剣で貫かれて血煙を上げながら吹っ飛んでいく姿や。

青桐自身の操っていた木の枝で突き通され、自滅したかのような驚愕の顔と。

跡形も残さないよう光の中で焼き尽くされて、空しく消えていった残骸。

全て、あの時起こってもおかしくなかった有り得た光景。

別に青桐の命が惜しいわけではないが、光景自体の気分の悪さは抑えようもない。

くすくすくすと、その思いに反駁するかのように笑う人影が在るのも、この夢の嫌な所だった。

「何なのだ、その額の青き耀いは……！ 貴様本当に何者なのだ……！？」

「あーあ……非力だから見逃してあげてたのに。まさかわたしを叩き起こすなんて、愚かなヒト」
生憎だなど、青桐も人影に向かい、ボロボロの身体に鞭打って血へどを吐きながら対峙する。

「其れがしも貴様を見逃す気はない。そのような姿を見てしまった以上は尚更だ」

そうして剣戟が交わされて、先程の光景に繋がっていく。

武丸達が知ったら悲しむなど、吐き気を堪えながらライムは、夢の終わりを待つしかない。

—これがもしも——……私の夢じゃなかったとしたら——……—

うなされるライムを心配そうに見守る少年達にライムは、ごめんとだけ、苦し気に呟いていた。

＊

私、死体が苦手なのかなと、目覚め一番にそんな事を思った理由はライムはわからなかったが。何やらわだかまっていた不快な気分は、新たなる不快状況にあっさりと塗り潰されていった。

「——何これ」

修行小屋の中には人の姿はなかったが、代わりに床一杯に広げられた服やら短刀やら卍型刃物に、ライムは三日間寝続けた不調にも気が付かないまま、隙間をぬうように何とか小屋の外へ出た。

「あら、目が覚めたの？ 丁度良かった、おはよう久しぶり、ライム♪」

「スーリィ……？」

武丸と佐助に文句を言ってやろうと思っていたのに、入り口の階段には編み物が一段落したらしい養姉が座っていた。

「随分今回はお寝坊さんだったわねえ。悪い夢でも見てたのかしら？」

「覚えてないけど……そんなに私寝てたの？」

「丸三日寝っ放しよ〜。多分人生最長記録ね♪」

丸……三日！？ と。ライムにしては最大限な驚愕の表情で固まる様子に、その顔を楽しみにしていたらしいスーリィがこころろ笑っていた。

「……ずっと編み物してたの？ スーリィ」

「そーよー。今の内に作り貯めておけば、また町に下りた時についでに売れるしねえ」

多分、出先で出来る暇潰しの一つだから、ここ数日は彼女はこの階段に座って編んでいた……つまり近くにいてくれたのだろう。こういう時ずっと「ありがとう」と言える性格でないライムは、黙り込みながらじっと顔を見るぐらいしか出来ず、その様子が尚更面白かったらしいスーリィはホホホと立ち上がってライムの頭をぽんぽん撫で叩く。

「調子悪くなさそうね。体慣らしに面白いもの見せてあげるから、ちょっといらっしやい」

「――？」

手招かれるままに後をついていくと。スーリィが向かっているのはどうやら、先日クレーターの出来た畑であることにすぐに思い当たったライムだったが。

「――うそ」

ぽかんと。毒気を抜かれるような素朴な驚きで目を丸くするライムの前には。

「あ、ライムさん！ 良かった一目え覚めたんだ！」

「あー、おねいちゃんだー」

これまでの前開きの上着は脱いで金属製の装具を露わにしながらか、もさもさと緑に染まっている畑から何やら固めの葉っぱを収穫している、楽しげな武丸と佐助の姿があった。

「スーリィ……パルスリーってこんなにすぐに実るの？」

「んなわけないでしょ。いくら雨とか晴れとかイイ感じで最近は続いてたとはいえ」

何故かスーリィは急に悔しそうな顔つきになると、収穫にいそしむ少年達を見ながら両手を握りしめている。

「あのコ達にこんな才能があるって知ってたら、もっと高いモノ植えてもらったのに……！」

「――へ？」

「早く大きくなるんだぞー。って話しかけたら、大体の作物はすくすく元気に育つんですって」

主に武丸の方を向いて言いながら、ディレスに連れていきたいわぁ……とぼつりと洩らしていた。

「あんたの雷よりよっぽど実用的よね、それって。残念だわ〜」

「……」

ぐうの音も出ない言葉と、そして「残念」と言い切っているスーリィは、ライムの頭の中なんてお見通しだったのかもしれない。

「ライムさーん、いっぱい採れたよー」

本当にこの手の作業に慣れているのか、ライムが採るよりよっぽど丁寧に収穫された葉っぱ達を見て、もう何度目かも覚えていない軽い溜め息をつく。

「武丸も佐助も、傷はもういいの？」

「おかげさまで、ほぼ完治しました！ ライムさんもおばさんも、色々ありがとーございます！」

「……に一ちゃん」

引きつった笑顔でこちらを見るスーリィに怯えた佐助が、兄の裾をくいっと思わず掴んでいた。

「……きれいに出来てるわね。町で売ればちゃんとお金になりそうじゃない」

「もっちゃん！ 俺達の里ってそれが表向きの収入源だもん」

――それで、と。

にこにこしている武丸に、相変わらずの仏頂面でライムは両腕を組むと、

「アンタ達、いつ出ていくの？」

淡々と全く表情を変えずにはっきり口にするライムに、二人の少年は派手にすっ転んでいた。

やっぱりねと笑うスーリィを後ろに、ライムは当たり前だしとだけ腕を組んだままぼやいて。

一度だけきよろ……と辺りを見回していた。相変わらずの自分のこの結論に、異議のありそうな誰かさんの尻尾を探して。

そしてこちらも相変わらずの、少年の食い下がりが続く。

「嫌だー！！俺達はここで畑を耕してライムさんに鍛えてもらうんだー！」

「餞別にそのパルスリー全部あげるから、路銀の足しにでもしなさいよ」

作物の権利も基本は畑を起こして一番手間をかけた者にあるのが、スーリィの教育方針だった。

「傷が治るまでは泊めるって言ったけど、その後のことは知らないし」

「ライムさん……変わってねーっ……」

「ていうか小屋ちゃんと片付けて行ってね。二人共何処にあんな沢山の道具隠してたのよ」

やれやれーという感じで、まだ沢山葉を残してあるパルスリー畑の雑草とりを始めたライムに、

「それじゃあライム。また明日、川岸で会いましょ」

ひらひらと手を振って畑から去っていたスーリィの言葉の意味を、当然わからないわけもなく。

しばらく養姉の後ろ姿を遠目で見つめているライムの斜め後ろで、何となく武丸と佐助は声をかけ辛そうに顔を見合わせていた。

「……明日から、剣の稽古再開か」

ようやく日常が戻ってきたんだなど、何故か実感し切れないうまま眩く感じだった。

その原因の一つかもしれない、よっしゃ！と勝手に雑草とりを手伝い始めた少年達の姿に、

「……………」

余計なことするなと難しい顔をするのは、さすがに疲れてしまったのか。特に何も言わずに好きにさせるライムに、あれっとなら二人がまた顔を見合わせていた。中々調子の戻らないライムは、

「——そっか……まだあの子の姿、見てないからだ」

「ライムさん？」

「おねいちゃん？」

今までよりはっきりと声の出ている独り言に、思わず二人から同時に呼びかけられる。

ついでのようにライムは二人に、顔は見ずに作業を続けながら尋ねていた。

「私が寝てた間、リンティの奴、来てないわよね？」

「うん。おねいちゃん見てないよ」

「俺も気になってただけだよさー。雨はわりとすぐに止んだし、もう元気なそうだよな？」

ふーんと、きいておきながら興味なさそうな返答のライムに、「??」と武丸が首を傾げる。

「アンタ達、これからどうするの？」

ぐぐっと。この流れでいきなりそう来たかと。淡々と少し覇気のないライムの真意をさっきから量りかねている様子で、武丸は難しい顔をしながら答えた。

「ライムさんが弟子にしてくれるまではこの近くにいるもん。畑とかだっけ手伝うもん」

「追っ手はもう来ないなんて確信はあるの？」

「ドレイみたいな感じでは来ないと思うけど。使者はまた来るんじゃないかなあ」

正直な見立てを口にする弟に、こらーっと兄が大人気なくつかかる。

「青桐はここで修行してろって言ったじゃん！」

「ドレイの言うこと、みんなきくかなあ……戦争始まっちゃったら余計に……」

何となく感じてはいたが、幼いながら佐助はかなり頭が良いようで、武丸も佐助の言うことはわかっているが、それでも敢えて楽天的でありたいといった感じにライムには見えた。

「それってさ……一生逃げ回って生きるか、いっぺんガツンと故郷に文句言うしかなくない？」

ぷちぷちとひたすら、細かい雑草まで追求しながらライムは続ける。

「どの道、一箇所に留まってていい事なんてなさそう。きっと同じ事の繰り返しだもの」

……と。二人して何だかしゅんとしてしまったので、初めてライムは雑草視線から顔を上げると。

笑顔なんて一つもこぼれるわけはなかったが、それでも何処か、少しは硬さの抜けた目で、

「でも武丸と佐助が故郷に文句、言いに行くってんなら。行きは付き合わないこともないけど」

私も散々迷惑かけられたしねと。声だけはいくらか笑ってるような軽さで口にしたライムだった。

「——え」

「ライムさん、それって……」

少し呆気にとられて手を止め、戸惑いにも近い目でライムの方を見る二人に、

「戦争始まるよりも前に、早い方がいいんじゃない」

だから早く出て行きなさいよとまた付け加えたが、以前よりは余裕のある心持ちで口にはしていることは。ライムも自覚している程だから、少年達にも伝わってしまったかもしれない。

……ま、それでもいっかな、と。

別に全然好きな野菜ではないが、もさもさと目の前で嬉しげに実ったパルスリーをつつくと、何となく楽しくて。それでこんな風に思えるのかなと、自分なりに納得したライムだった。

がさがさがさと……もう何本の草を蹴散らし、邪魔っけな木の枝を乱暴に払ってきたらう。一年前の記憶を何となく辿りつつ、それから何回か来たはずの北山を朝からずっとさまよい、つたく！ と、その辺の突き出た岩に腰掛けて、ライムはようやく一旦休みをとることにした。「フウ……探すと見つからないのよね、こーいうものって」何処にあんのよ、妖精の里、と。一年前よりもっとイライラした思いでパチパチと息をつく。

あれから一週間たったが、何故かリンティは一向に顔を見せず。さすがに気になってしまい、こうして再び妖精の里を探して北山に入ったライムだった。

妖精の里に入るには基本的に、妖精の同伴か許可がいるというのは教えられたので、もしかするとライムはブラックリストに入ってしまったのかもしれない。妖精を嫌っていた青桐の騒動を思うと絶対に有り得ないことでもないなど、苦々しい顔でまた溜め息がこぼれる。

「私のせいじゃないっつーに……あの子を巻き込んだのは悪かったけどさ」朝から夜までとにかく探し回ってはみたものの……ここまで妖精の里も、リンティ本人も出てこないということは、結局拒絶されてしまったのだろうか。

「にしたって、唐突過ぎでしょ。事情くらいは説明しに出てこいっつーの」さっきから独り言でも声に出しているのは、何となくだが、聞かれているかもしれない気がしていたからだ——妖精達ならそんな事も出来そうだなと。ライム自身には拒絶される理由が思い当たらず、それならあの子に何かあったのかなと、気になって来たのは本当だったこともある。

「あんまりヒトのこと放置してたら、雷落として山火事起こしちゃうぞー。……なーんて」自分が何かしでかして、その結果がこれなら別に構わない。もしかして隣山——ライムにとっては地元の双子峰を、「主」の居所は焼き野にするわ中腹以上は連続爆破させるわ、相当妖精達から響きを買っていたのかもしれない。「主」の周辺に関しては、ライムの責任もあったことだし。

「……………」
そうなるともう、帰るしかないかなー……。

弱気になりつつあったライムの数十メートル前をふっと。珍しい生き物が唐突に横切っていた。「……——猫？」

え？ と思わず立ち上がった先。少ない星明かりでもぎりぎり見える白が基調の毛色の猫が、前方の獣道に躊躇いなく入っていくのを目にする。

「町ではよく見かけるけど……この山奥ではちょっと……おかしいよね」最早、さまよい続けたこれまでと違う状況なら何でも良かったライムは、試しにその後を追ってみることにした。猫自体も知ってる動物の中では気に入ってる部類なので、あわよくば触りたい思いもあったかもしれない。

結局すぐに、猫の姿は見えなくなったが。こっちにいるかな？ と猫探しの方が優位になった気のそれ方が、妖精探しの的には良かったのだろうか。

「——え」
「——え？」

もうピンゴ過ぎるといふか何といふか、猫を追う内に出くわした小さな崖の頭上。崖っぷちに座って星を見上げる少女の姿があった。右目にかかる斜めがけの包帯を顔に巻いて。「ウソ……——ライ、ム？」

一年前、自力で妖精の里を見つけた時と同じような信じられないという顔が、今いる崖下からもしっかり見てとれる。どうやってここへ……？ と全く同じ問いかけもあり、ライムも結局よくわからないので、さあ？ と同じ答えを返した。

「何その包帯——あんた、怪我でもしたの？」
「——……あはは。ちょっとドジって、しばらく目を使いたくなっただけ」何だそりゃ？ と全然納得せずにつっかかるライムに、うーんとリンティは、「あの時光に当てられ過ぎちゃったかも。里で何とかしてもらおうとしたら、こうなっちゃった」そんな素振りには全然なかったような……と思いつつ、こういう時は追求しても無意味なパターンが多いので、仕方なく矛先を下げたライムだった。

「かっこ悪いからずっと引きこもってたのになあ。どうしてライムには見つけれられるのかなあ」
「……じゃなきゃ元々、出会ってないんじゃない」

それもそうかなと、ふわりとリンティは降りてくると。ライムと並んで崖にもたれて座り、膝を抱えるようにしながら、開いている左目で曇り気味な夜空をまた見上げていた。

「最初はてっきり、スーリィが小屋にしばらく張ってたから来なったのか、なんて思った」
ライムが眠っていた当初の三日間辺りに関しては、それは有り得た話だったが、
「それなら夜中に遊びに行くよお。あたしの時間は深夜が本領なんだからー」
一年前程ではないにしても、何故かテンションの低めな彼女も、そんな他愛のない話をしていく内に徐々に持ち上がってきたようだ。

「そう言えばあのコ達、どうなったの？ まだライムの所にいるの？」

「さぁ……どうでしょう。自分の目で確かめに来たら？」

面白くなさそうに言うライムに、あたしが行くとまずいかもよと、リンティは自嘲気味に笑い、
「ねえ、ライム……………どうしてあの時、あんなに怒ってたの？」

ライムの方を見ようとしないうまま、遠くの夜空に問いかけるように言った。

「あの時って、青桐のあの時？」

「ライムが光になっちゃった時。何気にあれ、ライム死んじゃってもおかしくない事態だったよ」
山の一部をぼろぼろにしたという反省はライムはしていたが、それとは違う問題のようだった。

話がよくわからず黙り込むライムに、もうっとリンティは不満そうにライムの方を見る。

「あたしがいなかったら燃え尽きてたんじゃないかなあ。自分で頭冷やせる自信あった？」

「それは……………あんまり、なかったけど」

「じゃあ気をつけてよね、二度と同じことにならないように。あの時本当はあたし——」
二度と姿を現す気はなく、消えようと思っていたのだと。

「ふーん……………つまり、死んだことにしたかったけど、私が暴走したから帰ってきたってこと？」

「だってあたしがいたら、青桐はいつまでも納得しなかったでしょ。多分他の忍者だってそう」
それであれから、ライム達の前に現れなくなっていたのかと——早くもパチパチが溜まり出した
ライムは、包帯顔でふくれるリンティを簡単に超える不機嫌声で、イライラをそのまま口にした。

「——これよ」

「——これ？」

「あんたがいい奴すると私、むかつく。妖精なら妖精らしく、我儘三昧でヒトの事振り回してよ」
……………と。呆気にとられたような顔で、パチパチがバチバチになっていくライムを見る。

「その方が退屈しないでしょ、私も。今はどうせ、他にやる事なんてほとんどないんだからさ」

「……………」

今は、でしょ…………と。膝を抱えて俯き、困ったように笑ったリンティが儂げに口にしていた。

「……信じられない。何処をど一見たら、あたしがいい奴したなんて思えるんだか」

「私もそれは同感なんだけど。あんた凄いい儘だけど……何でか、嫌いじゃないし」

大体ねえと、バチっと火花を一緒に走らせながら、

「見習い騎士的に守るって一応約束したんだから。騎士の誓いを、甘く見ないでよね」

自分で思っていたよりそれは大切な実意だったのだと、今回の件で自覚させられる事にはなった。

—何かなあ……………私ひょっとして、この子の親みたいな気分なのかな？—

そんな風にやっとモヤモヤが晴れてきたライムを、リンティは顔を上げて振り返るように見て、
「——うん。今度こそ記憶消してやろうと思ったけど、また気が変わっちゃった」

にこっと、悪びれなく綺麗に笑ってそんな事を言う妖精に。呆れてライムは頬杖をついた。

「あんたまだそんな事考えてたの？ これ以上消えたらほんと何も無いんだから、勘弁してよ」
それでなくても昔の記憶が無いライムには切実問題なので、ただストレートにぼやくのだった。

「何であんた、私の記憶消したいわけ？」

「……だってあたし……………ライムにだけは嫌われたくないもん」

ライムには沢山ウソついてると、その言葉まで嘘に聞こえる程、素朴な哀しい声色で言う。

記憶を消される——関わりを全て断たれる未来を、少女が本気で望む時は受け入れるしかない
かもしれない。そう思うくらい辛そうな目でリンティは小さく呟いていた。

それからしばらく、ライムもリンティも何とはなしに無言で星空観察の状態だったが。

「そう言えば青桐、私のこと最後に「てんのきみ」って言ったんだけど。どういう意味かわかる？」

「——天の君？」

暗い夜空に何か思う所があったのか。そんな事をきいてきたライムにリンティは表情を消すと、
「……——雷……………神の力で織り成される空の光……………——天を駆ける自然界の脅威の一端」

淡々とそんな言葉を連ねて、そういうことじゃない？ と静かに微笑んだ。

どんな偶然かその時夜空で、暗い雲から一筋の光がまるで生き物のように天空を駆けていった。
後に雷鳴も轟き、つまり雷だったわけで。——竜みたいだったねと、謎な事を言うリンティと、

「——じゃあつまり私、雷女ってこと？」

そのフレーズはあまり嬉しくないかと、ふてくされて睨むように空を見上げるライムだった。

「いいじゃーん、雷女！ わかりやすいし名乗り易そー！」

——と。何やら突然、ライム超バッチ・ネーミング！ と包帯顔でもはしゃぎ出す妖精がいた。

「ライムこれから雷女でいこ♪ 記憶なくても何かちゃんとした雷族とかの女ですって感じ！」

「ああもう、雷女雷女うるさい！ 誰がそんなだっさいガキみたいな名前で名乗るか！」

浮き沈みの激しい子供に付き合う、まさに親のような口調で、ライムはきっと口にしたのだろう。

あんたこそもう、妖精から幼精に改名しなさい、と。

— 了 —

少女の唯一の家族に近い妖精の戯言は、もう何十回目となったのだろうか。

「今度こそ……消してやろうと思ったんだけど……」

並べて置かれた細長い直刀と、杖のような形の白い鞘を手にとり、一つの武器に戻して微笑んだ。

こんなにキレイなヒト殺し、そう簡単には手放さないと……くすくす流れる紅い涙と共に——



Dragon Knight Dragonet ver.1 - preface to the first stage -

Since : 2013.9.29

Written by : Misato Okawa

The original work : Saki Kudo, Misato Okawa

ここまでご覧下さり、有難うございました。